私は加賀

Higashi—text

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
「他の加賀と一緒にしないで」
ある欠陥を持つ加賀さんの話
加賀さんの性格が少し柔らかくなっています
ーーーーー
皆様の作品に惹かれて始めました。
矛盾とかあっても見逃してください。

目次

01話 プロローグ1 ―― 1
02話 プロローグ2 ―― 4
03話 ―― 6
04話 ―― 15
05話 ―― 21
06話 ―― 29
07話 ―― 39
08話 ―― 47
09話 ―― 58
10話 ―― 70
11話 ―― 83

01話　プロローグ1

1話

「次は演習場使用許可の申請書ね」

秋の空には雲ひとつ無くどこまでも青い世界が広がっていて、そのまま視線を遠くに向けて行くといつの間にか海と交わり目の前の港に視線が帰ってくる。

今日はなんとも素晴らしい航海日和と言えるが、私は今執務室で仕事をしていた。

あぁ、こんな日に海に行けないなんて何と勿体無いのだろうか。もういっそ、海上で執務してやろうか。左肩にある飛行甲板を首から下げ机代わりにしながら、仁王立ちで執務をしている姿を想像してみた。これは無い。

私『加賀』がやるべき仕事は多い。

我が鎮守府の秘書艦業務は、資材管理、月次報告書の作成、大本営へ送る書類作成、スケジュール管理、ｅｔｃ…となかなか終わらないような重い仕事ばかりだ。

提督が不在の時は、代理で作戦立案や艦隊指揮なども行う。

演習場の使用予定を確認すると、天龍と龍田率いる第六駆逐隊の演習とバッティングしている。

目の前にある陽炎と不知火から提出された申請書をみて、少し考える。

「……どうしようかしら」

通常なら先に予約した方が優先されるのだが、今回は微妙なラインだ。

何故なら天龍達が演習場を使用する目的は演習ではなく、第六駆逐隊と遊ぶ為だからだ。時々天龍から提出される申請書には艦隊行動の訓練と書いてあるが、私はあの2人が第六駆逐隊と海上で鬼ごっこ

をしている事を知っている。私も時間あれば遊んであげられるのに。
誰も使用していない時は目をつぶるが、演習場本来の目的である演習をしたい艦娘がいる場合は遠慮してもらうとしよう。

この鎮守府は１００人を超える艦娘がいる。私が着任した頃は数人しかいなかったというのに、この鎮守府も大きくなったものだ。
この規模の鎮守府になると、どんなに少なくても秘書艦が２人または秘書艦補佐が必要になるが、私はその業務を１人で行っている。
提督も艦娘が増えるにつれ私以外にもう１人秘書艦を決めようとしていたが、私が拒否した。
それ以来いつも申し訳なさそうな顔を向けてくるが、無視している。あの人は作戦立案と戦闘指揮を行なっていれば良いのだ。適材適所という奴だ。
それにこれは私の仕事だ。他の子に頼ったり譲ったりするつもりはない。
よその鎮守府の加賀が私と同じ秘書艦になっても、私と同じ事は出来ないだろう。
私は他の加賀とは違うのだ。

私の仕事は秘書艦のそれだけではない。
鎮守府内の設備管理や壊れた箇所の補修、消耗品の交換発注などの些末な事から、艤装の修理や整備などの専門的な事まで行なっている。
明石と夕張もいるが、この２人が着任する前は全て私が行なっていた。なので余程酷い状態でなければ私でも対応可能なので手伝う事が多い。
今日もこの後、工廠で修理と整備を手伝う予定だ。
１００以上ある艤装の修理と整備をあの２人だけに任せてしまうととても終わらないし、私はそれよりも彼女達には開発を優先して行なってもらいたいと思っている。開発はあの２人に任せるのが一番良い。昔、私も開発に手を出した事があるが、あれは掛かる時間と労

力が半端じゃない。そういえば注文していたエンドミルと超硬バイトが今朝届いていたっけ。あれらはよく使う消耗品だから予備を切らせてはいけない。加工精度に直接影響してくる。

そんな状態なので私はいつも忙しいし、自分を仕事が出来る女だと思っている。

他の加賀とは違うのだ。

この様に比較的何でも出来る私だが、苦手な事が1つだけある。

ーーーー私は戦闘が苦手だ。

０２話　プロローグ２

２話

私の提督は執務が出来ない。
それは作戦立案と戦闘指揮は異常なほどに上手い我らが提督の唯一の欠点である。
なぜその２つができて執務が出来ないのか、誰もが不思議がっているが出来ないものは出来ないのだからしょうがない。
提督はその作戦立案と戦闘指揮という、卓越した２つの能力を買われて今に至っている。
しかもそういった人間に良くある、艦娘を兵器としてしか見ず無下に扱うという事もない。彼は艦娘をちゃんとした１人の人間として扱ってくれている。
私は提督を尊敬に値する人物だと思っているし、それはこの鎮守府に所属している皆も同じだろう。

そんな提督がまだまだ駆け出しで艦娘も少なかった頃、鎮守府で建造されたのが私『加賀』だ。
当時既に空母の鳳翔と翔鶴が着任していたので、彼は運も良いらしい。
しかし、建造した提督に似てしまったのだろうか、私には１つの欠陥があった。
それは執務が出来ないのが唯一の欠点である提督と同じ様に、私にとって唯一の欠陥だった。
正規空母『加賀』と言えば空母の中ではかなり優秀な性能を誇り、敵を発見すれば鎧袖一触、どんな提督でも一度は欲しがる艦娘だ。
そんな中、なぜか私は、

ーーー艦載機が１機しか載せられない。

どんなに矢を射ようがそれは1機にしかならないし、2本以上の矢を装備しようとしても艤装から吐き出されてしまう。
索敵機を飛ばしても大した範囲は確認出来ず、爆撃機を飛ばしても大きなダメージは与えられない。航空戦なんて一瞬で負けるし、鎧袖一触なんて夢のまた夢だ。
誰に調べてもらっても前例無しの原因不明であり、妖精さん達も匙を投げた為、実質改善の見込みはない。
唯一の救いと言えば、なぜか弾薬や魚雷を撃てずとも積む事だけは出来るので、補給艦の真似事が出来る事だろうか。
その為、私は戦闘で役に立たない。
もし出撃した時は、索敵か爆撃に僅か1機の艦載機を発艦させ、皆の後ろで守ってもらいながら補給を行うのが私の役目だ。
だが、普段の作戦ではそんな特殊な事をせずとも他の艦娘を艦隊に入れた方がはるかに効率が良い。
かつては一航戦などと呼ばれていた私がなんと情けない事だろうか。その内「一航戦の青い奴なんかと一緒にしないで」とか言われるのではないか。
建造された当時は、それでも何とかして皆の役に立とうと必死だったのを覚えている。
私は戦闘では役に立てない。ならばそれ以外の事で役に立とうとするしかなかった。
1機の艦載機を扱う事が出来る様になってから、私は出撃をせずに秘書艦の業務を覚え、艤装の修理と整備に手を出し、鎮守府の補修やその他些末な事もやる様になった。
ーーー私はこの鎮守府でそれくらいの事しか出来ない。普通の正規空母加賀という艦娘からしたら考えられない話だろうと思う。
ーーーーーー私は、泣きたくなるくらい、
他の加賀とは『違う』のだ。

03話

3話

「ふぅ……これで一旦終わりますか」

急ぎの書類を処理したので机の上を片付けながら、次にやる事を考えていく。

この後は工廠に行く予定だが、その前に天龍に会って演習場の件を伝えなければならない。

彼女はまた駆逐艦と遊んでいるのだろうか。任務は入っていないはずだから私の予感は当たっているだろう。天龍と龍田の2人は鎮守府の駆逐艦達からとても懐かれている。なので彼女達の任務がない時は、誰かしらが2人のもとを訪ねてそのまま一緒に遊んでいる事が多い。昔は私のポジションだったのに。陽炎と不知火なんてずっと私の後ろを付いてきて、「加賀さん」「加賀しゃん」と大変可愛らしい子達だった。ちなみに陽炎と不知火は私より早く着任した先輩であり、第1艦隊の主力でもあった為、当初はギャップに戸惑ったものだ。今はもうその様な姿は見せなくなったが、当時は駆逐艦が少なかったし寂しかったのだろう。

それは兎も角、そうだとすると天龍は中庭か遊戯室か誰かの部屋にいる可能性が高い。

執務室から見える中庭にいなかったら、館内放送をする必要があるな。そう思いながら中庭を覗くと、ちょうど彼女は中庭の中心にある木の所に駆逐艦達と集まっていた。

私はこのまま中庭経由で工廠に行こうと思いながら、執務室のドアを閉める。階段を降り、中庭に面する出入り口から外に出ると風で落ち葉が飛ばされていくのが見えた。少しそれを眺めて感傷に浸った後天龍達がいた方に向かうと、天龍と龍田、第六駆逐隊、陽炎と不知火がじゃんけんをしているのが分かる。こちらを向いていた陽炎がいち早く気づき声を掛けてきた。

「あっ、加賀さん！」

「陽炎、久しぶりね」
「本当よ。最近は遠征任務ばっかりで全然会えないんだもん」
「陽炎、私はよく会っていました」
「それは不知火が旗艦で任務報告する時でしょ。そのドヤ顔やめろ。旗艦じゃないと報告に行きづらいし、いつも忙しそうだし……」
「別に来てはいけないなんて決まりは無いわ」
「なら、私達が任務報告する時は全員で行ってもいいのですか？」
「ええ、電。来て良いわよ」
「よくやったわ電！　これで加賀さんにもっと会えるしもっと頼ってもらえる！」
「あ、暁としては、別にどっちでも良いんだけどね！」
「そんなこと言っていつも天龍に『私が報告に行くの！』なんて駄々こねているじゃないか」
「響!?なんで言っちゃうのよ！」
　ワイワイしている駆逐隊を見ていると、天龍が話しかけて来た。
「それで加賀さん、どうしたんだ？　何か用があったんだろ？」
「そうだったわ。演習場の使用許可の件だけど、他の子達と変わって貰っても良いかしら」
「俺達は別に良いけど、珍しいな」
「普通は先着なんだけどね。あそこで追いかけっこしている2人から真面目な訓練内容の申請書が来てるのよ」
　私はドヤ顔で逃げる不知火とそれを追いかける陽炎を見ながら言う。今は遠征任務によく行っているが、彼女達は普段第1艦隊に所属している。激戦で生き抜く為に、訓練はしっかりとやりたいのだろう。
「それに、あなた達の艦隊行動の訓練は演習場じゃなくてもここで出来るでしょう？」
「あー、俺たちがやってる事バレてるのか。ならしゃーないな」
「あら、あれだけ自信満々に『これならバレねーよ！　大丈夫だ！』とかいってたのにね～？」
「おい、龍田！」

天龍は龍田を睨むが、彼女はまるで気にしていない。
「ねぇ、加賀さん。今から一緒に遊びましょ？　私達鬼ごっこをするところだったの。」
「ごめんね、雷。これから工廠に用事があるの」
「そうなんだ…ならしょうがないわね。何か私に手伝える事ある？何でもいいわよ？」
「雷、私達第六駆逐隊が工廠で手伝える事なんてほとんどないんじゃないかな」
「みんな加賀さんを困らせちゃダメよ！　レディーは次に遊んでくれる時まで我慢できるんだから！」
「加賀さんは偶に遊んでくれるとすごく楽しいのです！　色んな遊びを教えてくれるしいつも楽しみなのです」
「みんな、ごめんなさいね。時間が出来たら遊びに来るわ。その時は新しいルールの鬼ごっこを教えてあげる」
私は手を挙げて別れの挨拶を済ませると、工廠へ向かって歩き出した。
歩きながら先ほどの電の言葉を思い出す。確かに滅多に遊ぶ時間はないが、特に最近は駆逐艦達と遊んであげれていない。艦娘の人数が増え、施設が大きくなり仕事が増えた為だ。次に遊ぶ時はスペシャル一航戦鬼ごっこを教えてあげよう。
何とか時間を作れないかと考えているうちに工廠の前に着いていた。

工廠の中では明石が妖精さんと一緒に何かをいじっている。初めて見るものなので、新たに開発している装備か何かだろう。
「お疲れ様です」
「加賀さんですか。お疲れ様です」
「それは新しい装備？」
「そうなんです！　…と言いたいところなんですが、まだまだ改良の余地ありですね。これじゃとても実戦では使えません」
「そう。あなたがそう言うなら間違いないんでしょうね」

明石と話をしながら私は自分の工具を準備して行く。これらの工具は私が集めた至上の一品達で、良くある安物とは格が違う。値段もさる事ながら、性能や使いやすさはその辺のものとは段違いだ。ドライバー1つ取っても、ネジへの吸い付きが全然違う。これらの積み重ねで、最終的に掛かる時間や完成度に差が出て来るのだ。
「あっ加賀さん、そのドライバー私も買いましたよ。やっぱり使いやすいですねぇ。」
そして明石と夕張にも同じ工具を徐々に布教している。やはり分かる人には分かるのだ。
「夕張は？」
「夕張さんなら、今は海上で長門さんの主砲のデータ取りをやってます。しばらくしたら帰って来ると思いますよ」
「そういえば長門は改二になったばかりですものね。どれだけ火力が上がっているのやら……」
工具の準備を終えて、保管してある艤装を持って来る。
これは吹雪の艤装だ。あの子は真面目だから自分でもある程度手入れをしているらしい。直ぐに整備を終えて元の場所に戻したら、次は睦月の艤装を持って来る。今朝は神通を旗艦とした川内三姉妹と吹雪、睦月、夕立で哨戒任務があったのでまとめて整備に出しているのだろう。
その後、整備待ちの艤装を全て整備して、修理が必要な艤装に手を出す。これは大井の艤装か。彼女が着任した当初、球磨型の姉妹艦はまだ着任しておらず、ずっと1人だった。私が見かねて話しかけたり食事に誘っていたら、いつの間にか懐かれていたのを覚えている。今では北上を含め球磨型全員が揃っているので以前ほど接点は無くなったが、偶に廊下で会うと笑顔で寄ってきて北上の話を聞かせてくれる。
その後、修理待ちの艤装も全て無くなり工具を片付けた所で夕張が帰ってきた。
「加賀さん、お疲れ様です。これから整備？」

「夕張もお疲れ様。整備と修理は終わったわ。それより長門のデータはどうだった？」
「えっ、全部終わったの!?　私がやる分もあったと思うんだけど……あ、長門さんのデータは……」
　夕張はレポートを手渡してきた。
「……なるほど。５１ｃｍ連装砲が装備できるのね」
「はい。特にアイオワさんなんか悔しがるんじゃないかな……ってこっちも大事！　あれだけあった艤装の整備と修理、１人でやっちゃったの？」
「え、ええ。そうね。後であなたが確認してくれると安心出来るのだけれど」
「うわー、マジかー、自信なくすなぁ……」
「夕張さん、大丈夫ですよ。夕張さんも十分早いじゃないですか。加賀さんが特殊なだけですよ」
「昔からやってるからね。整備と修理には自信があるのよ。余程酷い状態じゃなければ対応可能よ」
　少しドヤ顔で言ってみるが、夕張はまだ不満らしい。
「だってそれだと私達が仕事してないみたいじゃない。そりゃ空いた時間に開発出来るのは嬉しいけどさ……」
「あなたと明石には開発という立派な仕事があるでしょう。そちらを優先して貰いたいのよ。これはあなた達２人じゃないと出来ないのだから。……それなりに期待はしているわ」
「も、もう、そんな事言って、昔加賀さんも開発していたの知ってるんだから」
「……ちょっと待って。それどこで聞いたの？」
「提督から」
「全く、あの人は……」
「加賀さんは何を開発してたんですか？」
　明石も話を聞いたらしい。まあそこまで秘密でもないので普通に言うが。
「副砲よ。私は主砲が装備出来ないでしょ？　だからせめて装備出来

る副砲は良いものが欲しかったのよ。でも時間と労力が掛かり過ぎてね。正直、もう二度と開発はやりたくないわ」
「興味深いです。それって加賀さんの艤装と一緒に置いてあるやつですよね」
「そうね。私は出撃しないから使う機会はないけれど、今でも捨てずにとってあるわ」
　昔は調子にのって独自で開発をしていた事もあったが、効率が悪すぎるので自分ではやらない事にしている。
　修理や整備は誰でも覚えればある程度は出来るが、開発となるとそうもいかない。私はこの２人に任せるのが一番良いと判断している。私なんかでは足元にも及ばない。
　鎮守府の補修などとは訳が違うのだ。
　それにもうあの変なぬいぐるみが工廠に溢れかえるのは見たくない。泣きたくなって来る。
「そうえば加賀さん、最近なんか疲れてませんか？」
　明石に聞かれて答えに詰まる。確かに最近は疲れがなかなか抜けてくれない。もう私も歳なのだろうか。いやでも前から同じ様な事は時々あったし、今回もそのうち治るだろう。私はまだまだ若いはずだ。
「別に大丈夫よ。そんなに疲れている様に見える？」
「いえ、そういう訳ではないのですが、何となくそう思っただけです」
「加賀さん、無理はしないでね？　いつも忙しそうにしてるんだから。そうだ、新作の栄養ドリンクがあるから試してみてよ！」
　そう言って夕張は奥の方に入って行った。
　明石は苦笑しながらそれを見送り口を開く。
「夕張さん、いつも加賀さんの事心配しているんですよ？　今回の新作だって加賀さんの為に作った様なものなんですから」
「そ、そうなの？　それは嬉しいわね」
「私だって心配してるんですよ？　本当に疲れてませんか？」
「いつも通りよ。それより一応聞いておくけど、その栄養ドリンクは飲んでも大丈夫なのよね？」

「あはは、心配いりません！　私達2人で飲んで実験してますんで！」
「そう言って前に戦艦と重巡を駆逐艦みたく小さくした事あったわよね。あの時は大変だったんだから……」
「持ってきたよ、加賀さん！　これを飲めば疲れも一瞬で吹き飛ぶから！」
「ありがとう。後で頂くわ」
夕張から小さい瓶がたくさん詰まった箱を受け取ると、私は工廠を後にする。
明日あたりに夕張が感想を聞きに来るだろうから今日飲むのを忘れない様にしなければ。
時刻は既に夕方になるくらいだ。
海の端の方が少しオレンジ色に染まり始めているのが分かる。
そういえば寮の睦月型の部屋で、蛍光灯が切れていると連絡が入っていたな。薄暗くなる前には交換をしておきたい。寮といえば大和が酔って開けた壁の穴はちゃんと塞いだのだろうか。本人は責任を持って直ぐに塞ぐと言っていたが。やはり私がやった方が速いし、まだ出来ていない様ならやってしまおう。
急がないと艦隊が帰港する時間になってしまう。私は用具室に急いだ。

ーーーーー

「報告は以上です」
「ありがとうございます。夜遅いですが、ちゃんと入渠しくてださいね」
「はい。失礼します」
出撃していた全ての艦隊から報告が終わり夜も更けてきた頃、私は

資材管理表を見て今後の予定を考えている。
かなりの量が溜まってきたし、そろそろ建造で正規空母を狙っても良いかもしれない。魚雷と爆雷は消耗品だから予備を増やそう。いや４６ｃｍ砲も捨てがたいな。あれは金剛型全員に行き渡ってなかったはずだ。また金剛が拗ねてしまう。拗ねるのは構わないが、執務室で拗ねるのはやめて欲しい。しかもこちらをチラチラ見て慰めてオーラを出して来るのだ。
さすがに全部作るのは提督に叱られるだろうか。とりあえず明日提督が出張から帰ってきたら相談してみよう。
時計を見ると日付が変わってから結構な時間が経っていた。最後に帰港した子達はもう入渠して寝ただろうか。
「さて、そろそろ行きますか」
私は引き出しから飴がたくさん入った袋を取り出すと、執務室を出た。
この時間の海に月と星以外の光源は存在しない。幻想的な光景に見えるが、私はそれよりも恐怖を感じる事がある。それは私が正規空母だからかもしれないが。
真っ暗な海は水面の下が何も見えなくて、恐ろしい何かにどこまでも吸い込まれそうになる。
いつの間にかフラフラと近くまで行ってしまっていた様で、気づくと港の桟橋に立っていた。こんな所に用はないので工廠に足を向ける。

工廠には妖精さんがいる。
この時間でも誰かしらは起きていて何かしている事が多い。
その中の１人に私は近づいて声を掛けた。
「今日も差し入れを持ってきたわ。みんなで分けてちょうだい」
私に気づいた妖精さんは駆け寄って来ると嬉しそうに飴の袋を受け取る。その後起きていた他の妖精さんを呼び寄せ分配し始める。その様子がとても可愛らしく、私はじっと見つめていた。これは最近駆逐艦と遊んでいない私の、数少ない癒しの時間だ。妖精さんは見て

いるだけで心が洗われていく。
残った飴を奥に運んで行く子達を見ていると、残った子達が私の体に登ってきた。
「さすがに気分が高揚します」
私の肩や頭の上ではしゃぎ始めた妖精さんを見てニヤニヤしてしまう。今はさぞだらしない顔になっている事だろう。
こうして妖精さんと仲良くしていると、建造や開発で狙ったものが出やすかったり、言う事を聞いてくれる場合が多い。私は昔から続けている。なのでこのだらしない顔も昔から晒し続けている。
しばらく妖精さんと戯れた後、後ろ髪を引かれる思いで執務室に戻る。これから大本営への月次報告書を作らなくてはいけない。
今日は徹夜になりませんようにと祈りながら、私は机に向かった。

報告書を作りながらつい物思いにふけってしまう。
私は艦娘の存在意義である所の、深海棲艦を倒すという事が出来ない。私にはそれ以外のこんな事しか出来ないのだ。他の加賀ならこの様な事で悩む事はまず無いだろう。だからいつも考えてしまう。
ーーー私は他の加賀とは違うのだ。

０４話

４話

「翔鶴型航空母艦２番艦、妹の瑞鶴です。艦載機がある限り、負けないわ！」

数日後、私は執務室で今朝建造された正規空母の瑞鶴から着任の挨拶をされていた。

他の鎮守府だと加賀と仲が悪い事で有名であり、加賀が厳しい事を言うとそれに対して突っかかって来るらしい。

別にその加賀も意地悪している訳ではなく、成長を願って厳しくしているだけだと思うのだが。

「秘書艦の加賀です。あなたが瑞鶴ね。それなりに期待はしているわ」

私がそう返すと、瑞鶴はあっけにとられた様な顔で見返してきた。

「？　どうしたの？　私の顔に何かついていて？」

「い、いえ、そう言う訳じゃ無いんですけど、聞いてた感じと違うなぁと思いまして」

「既に何か説明をされているの？」

「説明と言うか、なんと言うか……ここに来るまでに卯月に会ったんですけど、加賀さんは五航戦が嫌いで見下しているから気をつけた方が良いとか、『五航戦の子なんかと一緒にしないで』が口癖とか……」

「もう、あの子はまた……瑞鶴、それは他の鎮守府での話よ。卯月に騙されているわ。私は五航戦が嫌いではないし見下してもいない」

「そ、そうなんですか。変な事言ってすみません」

「あの子は後でお仕置きです。ちなみに言っておくと、他の鎮守府の加賀も瑞鶴の成長を願ってそういう態度をとっているだけです」

「それはまた大変ね、ですね……」

「無理に敬語を使わなくていいわ」

「は、はい」

「固いわね。そういえば体に異常はない？　ここでは何かあればすぐ

に明石に見て貰えるから」
「大丈夫です」
「艦船だった頃の記憶はあるわね？」
「はい」
「そういえばあなた、幸運の空母なんですって？　素敵じゃない」
「別にそう言う訳じゃないです、一生懸命やってるだけ…よ」
「そうそう。それと一生懸命な子は好きよ」
　私は笑いながら言うと、彼女に鎮守府の案内をしようとドアへ向かう。
　なぜか固まっていた瑞鶴だが、急かすとすぐについて来た。
　鎮守府内を案内しつつ歩きながら考える。
　瑞鶴の指導役は赤城さんか翔鶴が適任だろう。まずは座学と体力作りからはじまるはずだ。それがある程度まで終わると海上での移動訓練、地上での発着艦訓練が始まる。その後、やっと海上での発着艦訓練だ。私の時も鳳翔さんに指導を受けた。
　大体の主要施設の案内が終わった後、彼女は生活用品を買うために、待っていた姉の翔鶴と街へ出掛けて行った。翔鶴はやっと着任した妹と過ごせる事が何よりも楽しいらしく、私が見ている間はずっとキラキラしていた。それを見送り、私は作戦司令室に引きこもっている提督の元へ指導役の件で相談に行く。明日までに指導役が決まれば良いのだが。

ーーーーー

　今、私は先ほどまでの自分を殴りたい。なぜあんなフラグを立ててしまったのか。

瑞鶴の指導役は私になった。

最初は辞退しようとした。別にあの子が嫌いとかではない。一生懸命な子は好きだ。欠陥がある私では最後まで指導出来ないし、正規空母として活躍している艦娘は他にもいるという理由だ。これでは瑞鶴がかわいそうだと思わないのか。

しかしそれは認められなかった。私が出来る基礎指導までは私が行い、あとの応用は赤城さんが行うらしい。これは瑞鶴を除く他の正規空母達と全員で話し合い、そう決めたとの事だ。ちょっと、それ私は呼ばれて無い。仲間外れか。泣くぞ。

普段の業務が忙しいからという理由は、他の子が手伝うから大丈夫と封殺された。それはダメだ。絶対ダメだ。この仕事を譲るつもりは無いし、誰かに頼るつもりもない。他に断る理由が思いつかなかった私は、結局瑞鶴の指導役を引き受ける事になった。

翌日、私は執務室で瑞鶴と向かい合っている。

「改めて、秘書艦の加賀です。本日よりあなたの指導役に任命されました。よろしくお願いするわ」

「はい！　よろしくお願いします！」

「まだ固いわね。分からない事があったらなんでも聞いてくれて構わないから」

「わかりました」

「これから私とあなたは1週間毎に提督へ報告書を出す事になります。目的は指導がどの段階まで進んだか、ちゃんと指導役が指導をしているのか、お互い認識の違いはないか、あなたの理解度はどの程度なのかをフィードバックする事です。訓練の感想や私に対して思った事、例えば不平不満や悪口を書いて貰っても構わないわ。私があなたの報告書を直接閲覧することはありませんから、遠慮なく正直に書くこと」

「わ、わかりました」

「それではこの後１０００に第２会議室に集合。今後の大まかな予定を説明するわ」
瑞鶴が退出してドアが閉まると、私は終わっていない執務を片付け始める。ただでさえ忙しいのに瑞鶴の指導をするとなると、時間の使い方を考え直す必要がある。
それにしてもなぜ指導役が私なのか。赤城さんや翔鶴もいると言うのに。何なら飛龍と蒼龍だって出来るはずだ。
また、私の欠陥である艦載機を１機しか載せられないという事実は、私の指導が終わるまで関係者の間では伏せられる事になった。新人を不安にさせない為と聞いたが、この鎮守府の艦娘はみんな知っているのだから絶対誰かからバレると思う。
……なんだか今すぐにでも自分からバラしたくなって来た。でもバラして指導役交代させられたら嫌だし。ああもう、なら言えないじゃないか。
必死に執務を終わらせながら、私は謎の葛藤をしていた。

ーーーーーー

あれから１ヶ月。
瑞鶴への基礎指導は順調に進んだ。
私はなんとか時間を作り瑞鶴の指導を行なっている。睡眠時間は減ったが意外となんとかなるものだ。夕張の栄養ドリンクがなければ危なかったかもしれないけれど。
まだ座学は続いているが、彼女は物覚えが良い。体力もある程度は付いてきたし、そろそろ海上移動か地上での発着艦訓練をさせてみるのも良いかもしれない。
私が走る後ろで、苦しそうにしながらも、なんとかついて来ている

瑞鶴を横目で見ながらそう考える。
季節はもう冬だ。海からの風は氷の様に冷たく、頬を撫でて何処かへと流れていく。
寮の各部屋にはコタツが出され皆の時間を奪っているだろう。
スタート兼ゴール地点が見えてきたのでスピードを落とし歩く速さを維持する。私は到着する頃には呼吸が落ちついてきていたが、瑞鶴はまだまだ辛そうだ。膝に手を付いている。
「だいぶ体力が付いてきたわね」
「はぁ、はぁ、はぁ、なん、はぁ、で、はぁ、かが、はぁ、さん、はぁ、は、はぁ、そんなに、はぁ、余裕、はぁ、そう、はぁ、なのよ、はぁ、はぁ、はぁ」
「だ、大丈夫？　……ちょっと速すぎたかしら」
少し無理をさせすぎたかもしれない。
私との距離が離れないからまだ余裕があると思ったのだが。
「呼吸が落ち着いたらこれを飲んで座ってなさい」
彼女にスポーツドリンクを渡すと私はタイムの記録を付けて片付けを始める。それが終わると座った瑞鶴が話し掛けてきた。
「ねぇ、加賀さん」
「なに？」
「どうして加賀さんは私に優しいの？」
「いきなりどうしたのよ？　優しくない方がいいの？」
「私、他の鎮守府の加賀さんと瑞鶴の事、時々聞くんだ。よくうちの艦隊が演習しに行くでしょ？　その時に2人の事見るみたいで。同じ様に仲が悪くなってないか聞かれるんだよね」
「そう」
「もしかして私に遠慮してる？」
「別にそんな事ないわ。私はあなたなら厳しくしなくても大丈夫だと思ってるから」
「そ、そうなんだ。でも一応言っておくけど、私に対して変な遠慮とかはしないでよね」
「そんな事しないわ。あなたも私に遠慮しなくていいのよ？」

「……うん、分かった」
「そろそろ歩ける？」
「まだ無理……じゃ、じゃあさ、手、握っても良い？」
「え？　手？　別に良いけど」
「やった！　外で寒いしさ、加賀さんの手って暖かそうだから触ってみたかったんだよね」
「なによそれ……」
　私は呆れながら右手を差し出す。
　えへへ、やっぱり暖かーいと笑いながら手をにぎにぎしてくる瑞鶴をしばらく見ていたが、なんだか急に恥ずかしくなってきて私は目を逸らした。

０５話

５話

年明けの雰囲気がまだ残る鎮守府。
瑞鶴が海上移動訓練を開始して数日が経った頃、私が居る執務室に赤城さんと翔鶴が入ってきた。
「珍しいわね。執務室に２人で来るなんて」
「たまたま翔鶴とそこで会ったんですよ」
「そう。何かあった？」
「瑞鶴の調子はどうかと思いまして。指導は順調だと聞いてますが」
「大丈夫よ。あの子は物覚えが良いし、体も動きも悪く無い。まだまだ基礎指導は残っているけど、赤城さんに引き継ぎをする時にはすぐに応用に行けるくらいに仕上がっていると思うわ」
「そうですか、それは楽しみです」
「あ、あの、うちの瑞鶴がご迷惑お掛けしていませんか？」
「迷惑なんて掛けられた記憶はないわね」
「そう、ですか。加賀さんがこう言ってるんだから大丈夫なのかな」
「心当たりでもあるの？」
「……実は私、瑞鶴の報告書を見せてもらう事があるんですけど、少し前からあの子報告書に『今日も加賀さんの手は暖かかった』とか、『加賀さんの髪が綺麗だった』とか指導とは関係ない事も書く様になっていて……。ご迷惑をお掛けしているんじゃないかと……」
「あら、加賀さん愛されてますね？　何だかドキドキしてきました」
「赤城さん、からかわないでください。それにしてもあの子、そんな事を書いてるのね。確かに感想とか遠慮せず正直に何でも書いて良いって言ったけど……。それで提督は何て言っているの？　私の方には何も言ってきてないわ」
「面白いからとむしろ推奨している様で……」
「……本当にあの人は……真面目に仕事をして欲しいものね」
「あの、私からやめる様に言いましょうか？」

「いえ、それには及びません。感想や思った事を書いて良いと言ったのは私ですし、本来私はあの子の報告書の内容は見れないはずですから。提督が推奨している以上、聞かなかった事にします」
「加賀さん、ひょっとして照れてます？」
「そんな訳ないでしょう」
「それにしても随分と懐かれてるんですね」
「そうなんですよ、赤城さん。最近なんて訓練から帰って来ると加賀さんの話ばっかりなんですから。少し嫉妬しちゃいます」
「懐かれてないです。それに翔鶴の話がつまらないから私を話題にしてるんじゃないの？」
「そんな、加賀さん酷いです」
「まあまあ翔鶴、やっぱり照れてるのよ」
「照れてないです」
「耳赤いですよ？」
「赤くないです」
「あ、顔も赤くなってきた」
「……」
「「かわいいですね」」
「頭にきました」
私が立ち上がると2人はキャーキャー言いながら執務室から逃げて行った。
まったく……駆逐艦じゃないんだから廊下であまりはしゃがないで欲しい。
それにしても、私は瑞鶴に懐かれているのだろうか。確かに最近よく近くにいるし話しかけて来るが、それはよく指導をしているからだろう。
ま、まぁ、懐かれて悪い気はしないが……。
いや、まだそうと決まった訳じゃない。これは赤城さんと翔鶴が勝手に言っている事だ。
私は気分を切り替えようと深呼吸して、執務に取り掛かった。

ーーーーーー

どうやら私は瑞鶴に懐かれているらしい。
目の前に座るニコニコした彼女を見れば、さすがの私でも納得せざるを得ない。

ここは街にあるファミレスの一角にあるテーブル席だ。
そろそろ寒さがやわらぎ、コートが要らない日も増えてきた。暗くなった空には相変わらず月と星が輝いている。
家族連れやカップルが夕食を楽しむ中、私達もそれに混ざって食事をとっていた。

追加でデザートを選んでいる彼女を見ながら思い出す。こうなったきっかけは何だっただろうか。

事の始まりは瑞鶴の様子がおかしいのに気付いた時だったと思う。
鎮守府の共有スペースで、私は瑞鶴に座学の指導として講義をしていた。普段は空いている会議室などで行うが、あいにく今日のこの時間帯はどこの会議室も使用中で空いていなかった。
講義が終わり立ち上がろうとすると、瑞鶴は私に何かを言いたそうに口を開いては閉じたりを繰り返したり、こちらをチラチラ見てきたりで落ち着かない。
どうしたのだろうか。講義の最後に質問があるか聞いた時は大丈夫と言っていたが。
「どうしたの？　どこか分からない所でもあった？」
「っ、いや、それは大丈夫なんだけど……」

「……何か相談？」
「相談……というか何というか……」
何ともはっきりしない感じだ。彼女にしては珍しい。
それともここでは言いにくい事だろうか。
「……ここでは言いにくい事なのね。分かったわ。後でいつもの会議室で話しましょう」
「そういう訳じゃ……」
しかし彼女は一旦そこで止まると、何か考えた後に、
「いや、待った!!　相談ある！　加賀さんに相談ある！　だけどここじゃ話しにくいから明日街まで付き合ってくれない!?」
どういう事だろうか。
会議室がダメで街ならば良いということは、瑞鶴の言う『ここ』とは鎮守府全体の事なのか。それは鎮守府内では絶対誰にも聞かれたくないという事か。

……もし、脱走したいとかだったらどうしよう。

私の指導は厳しすぎただろうか。前に本人から優しい云々聞いた気がするが、いつの間にか私は調子にのって厳しくしてしまっていたのか。
いや、待て待て。それなら私には相談しな……瑞鶴の性格からして文句を言いに来るかもしれないが、そうだとしたら最初から脱走はしないし相談は鎮守府内でもいいはずだ。
なら生活面で問題が？　イジメか？　実は私が見ていない所でイジメられたりしていたのか。イジメが辛くて逃げ出したいとか。
いやいや、うちの子達はそんな事しないはずだ。
他には身体面で何かあった？　でも休みは定期的に取らせているし、脱走を考える前に明石に相談に行くだろうし。……もしかして、妊娠!?　それなら脱走するのにも頷ける。いきなり妊娠なんかしたら鎮守府として問題になるし、監査なんかが来たりしてみんなに迷惑が掛かる。……相手は誰だ。提督か？　それなら彼が辞任すれば

責任は取れるが、誰とも知らない人とかだったら本気でまずい事になる。
……違う、落ち着け私。もしそうなら、相談相手は私の前に姉の翔鶴だ。その後に翔鶴から私に相談が来るはず。だからこれはありえない。

そもそもまだ脱走かどうかなんて分からないじゃないか。
というか翔鶴ではなく私に相談するなんて、本気で内容が想像出来ない。いや、もう既に相談はしたが解決しなかったのかもしれない。
「…さん。加賀さん！　おーい！」
「えっ？　あ、あぁ街までね。良いわよ」
「どうしたの？　大丈夫？」
「……瑞鶴、何にせよ余り思い詰めないでね」
「うん？　わ、分かった」
結局、待ち合わせの時間と場所を指定され、その日はそのまま別れてしまった。

ーーーーーー

翌日、相談内容に戦々恐々としながら一睡も出来ずに待ち合わせ場所へ行くと、既に瑞鶴はそこで待っていた。
こちらに気が付くと、手を振りながら近づいて来る。
彼女の全体的に暗い色でまとめられた服はとてもかわいらしく似合っていて、思わず見惚れてしまった。
「加賀さん？　どうしたの？」
瑞鶴は私の前に来ると不思議そうな顔でこちらを伺ってくる。
するとすぐにニヤニヤし出して悪戯っぽく言ってきた。
「分かった！　私がかわいくて見惚れてたんでしょ？」
図星を突かれ、思わず下を向いてしまう。

「……よく分かったわね」
言ってしまってから気付いた。
何言ってるんだ私は。テンパりすぎだろう。
今の私の顔は羞恥で赤くなっているに違いない。
恥ずかしくて思わず睨みつけると、瑞鶴も固まったまま顔を赤くしている。
「……」
変な沈黙が続いてしまう。
ダメだ。昨日からどうも調子が悪い。

私は一度深呼吸して気持ちを落ち着けてから瑞鶴に問いかけた。
「それで、相談という事だったけど、どこか場所の宛てはあるの？」
「え、えーと、とりあえず街に行ってから考えようと思う」
「そう」

私と瑞鶴はとりあえず街を歩く事にした。
最初は座って話が出来る店を探していたが、途中から瑞鶴が雑貨を見たり服を選んだりし始めて、それに付き添って行く。私は猫のマグカップは恥ずかしいし、かわいい系の服は似合わないから遠慮したいのだが。
マグカップは2つセットだと安いからと言われてお揃いのを買ったが、いつ使えば良いのか。とりあえず赤城さんと翔鶴がいない所で使おう。
その後は完全に目的を履き違えたまま過ごし、気付くと流行りの映画を見たりしていた。

そして夜になり、今私達はファミレスで夕食を食べている。
瑞鶴は出てきたケーキを幸せそうに食べていて、思わず私も顔が緩んでしまう。
今日は楽しかった。

駆逐艦と一緒に遊ぶ事と妖精さんを見る事以外でこんなに楽しくて癒されたのは久しぶりだ。
そう思うと思わず笑みを浮かべてしまった。
瑞鶴が驚いたように顔を赤くしているのを見て、しまったと思った。やはりまだ調子が悪い。
私は誤魔化す様に問いかける。
「それで結局、相談は何だったの？」
「あー、それはその……」
瑞鶴は気まずそうにした後、また今度話す、と言って黙ってしまった。
まぁ、既に意外と遅い時間だし仕方ない。
また日を改めて相談を受ければ良いか。
「そう」
それに、また瑞鶴と出掛けるのも悪くない。

夜の空を2人で眺めながら、鎮守府に戻って来る。今夜は満月だから月がとても大きく見えた。
瑞鶴と別れる時、次はいつ時間が空いて出掛けられるか聞かれた。今日は出来なかった相談についてだろう。
正直言って仕事の量によるから分からない。今日はたまたま急ぎの仕事が少なかった。
それを伝えると瑞鶴は複雑そうな顔で言った。
「じゃあ、私も加賀さんの仕事手伝う。そうすれば、すぐにまた出掛けられるでしょ？」
彼女の言葉はありがたかったが、私は誰かを頼るつもりはない。それに彼女には自分の訓練を優先して欲しかった。
私は、手伝って欲しい事が出来たら言うわ、と返し瑞鶴と別れる。
しかし、今日は本当に楽しかった。
まだ残っている仕事を徹夜でする事も余り気にならない。2徹は

久しぶりだ。

私は一瞬だけ後ろを振り返ると、執務室へ向かい報告書を作り始めた。

０６話

６話

あれ以来、瑞鶴は事あるごとに私の所に来て、何か手伝える事はないか聞いてくる様になった。昔の雷を思い出す。

私が出した課題は終わったのか聞いて見ても、いつも完璧に終わらせてから来るので強く言い返せない。雷はやってない事が大半だったので大体ここで引き下がっていた。ていうか、あの課題こんなにすぐ終わらせるのか。これで新人とか自信なくすわ。

もう１つ、変わった事がある。

それは瑞鶴の相談を受けに街へ出掛ける様になった事だ。もちろん私は忙しいのでそんなに頻繁には行けないが、瑞鶴が仕事を手伝って来ようとするので、少し余裕がある時は仕方なしにＯＫしてしまっている。

相談の内容は相変わらず分からない。瑞鶴が自分からその事を話さないからだ。私からそれとなく聞いて見てもはぐらかされてしまう。私にも言いにくい事なのかもしれないし、向こうから言い出すのを待っている状況だ。

「加賀さん、お昼行こう！」

「はいはい。ちょっと待ってなさい」

「早くしないと食堂の席なくなっちゃうよ？」

また、懐かれた影響かは分からないが、最初に２人で街に出かけた時から、瑞鶴は私のそばに居る時間が長くなった気がする。

今みたいによく食事に誘われる様になったし、一緒に間宮へ行く事も多い。執務室にわざわざ質問をしに来る事もある。

懐かれる事自体は嬉しいし、瑞鶴と過ごす時間は楽しくて、ついつい私も浮かれてしまう事が多い。

そして、別れる時は決まって寂しくなるのだ。

ーーーーー

私達が食堂に着くと、ドアの前に人だかりができていた。
よく見ると、ドアに何か貼ってある。
「みんな、ちょっと通してもらって良い？」
「あ、加賀さん！　あれどうにかならないの!?」
なんだなんだ。どうしたというのか。なんかみんな凄く必死なんだが。
私は貼ってある紙を覗き込んだ。
「……そんな……嘘、でしょう……」
内容は単純なものだった。
来月から間宮さんが地方の鎮守府に出張するというお知らせだ。
まだ建造されたばかりの他の間宮達補給艦に指導を行う事が目的らしい。
しかし出張期間の終わりが未定となっている。
これはしばらく帰ってこれないという事ではないか。
私はすぐに食堂に入ると間宮さんへ問いかける。
「間宮さん。ちょっと良いかしら」
「あら、加賀さん。お疲れ様です。何にします？」
「日替わり定食で。ってそうじゃなくて、出張の件よ。帰って来る日程が未定となっているのだけど」
「あぁ、それなんですけど、ちょっといつまで掛かるか分からないんですよね。結構な数の鎮守府から指導の依頼が来ているらしくて」
「結構な数って……1箇所ではないって事？　それは下手したら1ヶ月以上戻ってこないという事では……」
「そうなるかもしれませんね」
それを聞いて、私はめまいがした。
何という事だ。最低でも1ヶ月、間宮さんがいないなんて。
後ろで聞いていた子達も悲鳴をあげている。そんな中、瑞鶴は不思

議そうにしていた。
「な、なんでみんなそんなにショック受けてるのよ？　こういうのってよくある事じゃないの？」
間宮さんにチャーハンセットを頼みながら彼女は聞いてきた。
確かに他の鎮守府に同艦が指導にいくことはよくある事だ。でも今回はそうも言っていられない。
「瑞鶴、よく聞いて。こういう場合、みんな持ち回りで食事を作るのだけど、……うちの鎮守府には比叡と磯風とそれに準ずる艦娘がいて、彼女達は凄く料理を作りたがるわ」
「それって……確か余り美味しくないんだっけ？」
「あれはそういう次元じゃないわ。下手したら鎮守府が壊滅します」
「あはは、壊滅ってそんな大袈裟な」
瑞鶴は始め笑っていたが、周りの反応をみて冗談じゃないと気付いたらしい。
「……どうするの？」
「……ちょっと考えさせて」
私と瑞鶴は間宮さんから定食を受け取ると、近くの席に座り食事を始めた。

ーーーーー

私は執務室で食事の件を考えていた。
「これは……持ち回り制を廃止するしかないかも」
色々検討したが、これが一番効果的だ。
特定の艦娘のみが料理をすると報せれば、他の子達は自分も料理をすると言いにくいだろう。デメリットは間宮と同じく1人で全て行わなければならない事だろうか。料理する子が2人以上いれば自分

も手伝うと言い出しやすくなってしまう。
問題は、誰が料理をするかだが。
「……私がするしかないでしょうね」
料理ができる子は他にもいるが、それでは艦隊行動に影響が出かねない。何しろ1ヶ月以上の間拘束されるのだ。1日3食を用意し、それ以外にも甘味処の営業もある。とても出撃なんて纏まった時間は取れないだろう。特に甘味処などは艦娘の士気に関わってくる為、絶対に開けなければならない。

ああ、これはもう寝る時間がほとんど取れなくなるな。私達艦娘は人間よりも丈夫に作られているからなんとかなると思いたい。
「でも、これはさすがにキツいかしら」
しかし、鎮守府が壊滅するよりはマシだ。
そうと決まればやる事は1つ。

ーーー料理の練度上げだ。

ーーーーー

翌日から私はひたすら料理を練習した。今までの仕事もある為、1日の中で出来る時間は限られる。しかし時間が許す限り、練度上げとレパートリーの数を増やす事に集中した。
間宮さんにも時々見てもらいながら練習を繰り返し、ようやく納得出来るレベルになったところで彼女の出張期間へと入った。
間宮さんは私の料理を美味しいと言ってくれたが、これで鎮守府のみんなは満足してくれるだろうか。

私が食堂の厨房で準備をしていると誰かが食堂に入ってきた。こんな朝早くに誰だろうか。まだ準備が終わっていない。
「ごめんなさい。あと少し待ってくれるかしら」
「おはようございます。加賀さん」
「赤城さん？　おはようございます。どうしたんですか？　こんな早くに」
「加賀さんの料理を久しぶりに食べれると思ったら、早く起きてしまって」
「もう、やめてください。間宮さんと比べたら練度もレパートリーもまだまだです」
「どちらも美味しいですよ。それに早く来たのは私だけじゃないですから」
「私も楽しみで早起きしてしまいました」
「翔鶴もいるのね。昔はよく食べたでしょうに」
「だからこそですよ。加賀さんの料理は美味しいですから、ねぇ不知火さん？」
「はい。私は好きですよ。加賀さんの料理」
「ちょっと、今どこから出て来たのよ」
「翔鶴さんの後ろに隠れてました」
「あなたって昔からそういうの得意よね。陽炎は一緒じゃないの？」
「陽炎は起こそうとしたんですが、ダメでした。昨日一緒に行くと約束したのに。もう知りません」
「そんなに拗ねないの」
　私は準備が終わると注文を聞いて調理を開始する。料理を出すときに不知火と翔鶴の会話が聞こえてきた。
「そういえば翔鶴さんがいるのに瑞鶴さんがいませんね」
「瑞鶴なら陽炎さんと同じで起きれなかったんですよ。昨日約束してあれだけ楽しみにしてたのに」
「それが普通よ。まだ外薄暗いじゃない。どうぞ、できたわよ」
「あら、いい匂い。加賀さん、ありがとうございます」
「本当ですね。ありがとうございます」

その時、誰かが廊下を走って来る音が聞こえて来た。食堂の前で止まると勢いよくドアを開けて入って来る。
「ちょっと翔鶴姉！　1人で先に行っちゃうなんて酷いじゃん！」
「あなたが起きなかったんでしょう？」
「か、加賀さん!?　た、確かにそうなんだけど、で、でも約束してたのに……」
「瑞鶴、私はちゃんと起こしたわよ？　でもあなた全然起きようとしなかったじゃない」
「いつもは起きるまで無駄にくすぐったりしてくるのに、今日はしてこなかったじゃん！」
「だってあれだけ幸せそうな顔してたら起こし辛くて……どんな夢見てたの？」
「それはかが……蚊が飛んで来る夢よ！」
「瑞鶴、あなた蚊が好きなの？　変わってるわね」
「加賀さん違うから！　不知火も何でニヤニヤしてるのよ！」
「別にそんな顔してません。これは生まれつきです」
「普段はもっとクールに決めてるでしょ!?　その顔やめて！」
「そこまでにしなさい。瑞鶴も何食べるか決めなさい」
　他の料理を出しながら瑞鶴に注文を聞くが、なかなか決まらないようだ。まだ混んでないしゆっくり決めれば良いと思うが、なぜか彼女は焦っている様に見える。
「瑞鶴さん、迷ったら肉じゃががオススメです」
「そ、そうなの？」
「はい。不知火は加賀さんの肉じゃがが一番好きです。それに加賀さんの得意料理です」
「じゃあそれにしようかな」
「肉じゃがね。少し待ってて」
　私が肉じゃがを準備していると、赤城さんがお代わりをしに来た。
「加賀さん、お代わりをお願いします！」
「分かりました。少し待っててください」
「それにしても、料理の腕を上げましたね」

「ありがとう、赤城さん。はいどうぞ」
「やっぱり加賀さんのご飯は美味しいですね。他の人の分まで食べてしまいそうです」
「「それはやめて下さい」」
「瑞鶴も加賀さんも冗談が通じないですね」
「赤城さんが言うと冗談に聞こえないんだけど」
「なんですかそれは。確かに私は他の人よりほんの少し多く食べますけど、そこまでたくさん食べません」
「間宮さんから赤城さんは要注意と聞いています。何かやらかした事があるのでは？」
「さぁ？　知らないですね」
「まったく……はい、瑞鶴の肉じゃができたわよ」
「わぁ、ありがとう加賀さん」
その後、段々食堂に人が来はじめて雑談する余裕は無くなってしまった。概ね私の料理は好評だったらしく、瑞鶴なんかは感動していたと不知火から聞いている。

ーーーーーー

昼の仕込みを終わらせて執務室に戻ると、私は今日の仕事を片付け始める。しばらくするとドアのノックと共に明石が入室してきた。わざわざ彼女がここまで来るのは珍しい。普段の報告と連絡は私が工廠に行った時に済ませてしまうからだ。
「どうしたの？　工廠で何かあった？」
「いえ、大丈夫です。ちょっと確認しておきたい事がありまして」
「何かしら」
「加賀さん、無理してません？」
「別にいつも通りだけど……」
「本当ですか？　」

「ええ、大丈夫よ」
彼女はジッと私を見つめた後、気遣わしげな顔で言ってくる。
「加賀さん。疲れが溜まって辛いようでしたら言って下さいね。オーバーホールしてあげます」
「怖い事言わないで」
明石はそう言って執務室から出ていった。
それにしてもそんなに疲れた様に見えたのだろうか。確かに疲れてはいるがまだ大丈夫だ。そんなことより仕事をしなければ。
今日はまだ昼食と夕食の準備もしなければならないし、甘味処だって開けなければならないのだ。瑞鶴の指導や工廠での整備と修理、鎮守府の補修、細かな手配など執務以外にもやる事は詰まっている。今日はまた徹夜かもしれない。
私は次の書類に目を通しながら間宮さんの出張が早く終わる事を祈るしかなかった。
夕張に栄養ドリンクの追加を頼んでおこう。

ーーーーーー

そんな状態がしばらく続き、1ヶ月が経とうとした頃、私は体の不調を感じ始めていた。
頭痛とめまいが頻繁に起き、身体中がだるい。食欲も落ちている。少し無理をしすぎたかもしれない。
しかし、休むわけにはいかなかった。今私が休んだら鎮守府全体に影響が出てしまうし、他の誰かが私の仕事をするはめになる。それは戦力の低下や遠征の遅延にも繋がる。どうしてもそれだけは避けたい。
明石に以前調子を聞かれた時から見た目や振る舞いには気を付け

ている為、周りは私の不調に気付いていない。もともと疲れが表に出にくい事も幸いした。このまま間宮さんが帰って来るまで黙っていれば、何とかなるだろう。
私の仕事は誰にも譲らない。

今私は瑞鶴の指導をしている。既に地上での発着艦訓練も始まり、少しは形になって来た。まだ合格点はあげられないが。
瑞鶴は弓道場で弓を構えながら、ジッと的を見ている。指導した自分が言うのも何だが、素晴らしい姿勢だ。集中しているのがここまで伝わって来ていて、瑞鶴の周りだけ別空間のように感じる。こういう所は翔鶴にそっくりだ。

それを見ながら私はずっと考えていた。この訓練の後にある海上での発着艦訓練が終わったら、私の指導役としての立場は終わってしまう。1機しか艦載機を載せられない私ではそこまで教えるのが限界だ。それ以降は赤城さんが指導役となり訓練を行なっていく。赤城さんに指導役が変わる事は最初に瑞鶴にも話してあるので滞りはないだろうが、彼女の指導役でなくなる事に私は何とも言えない気持ちになっていたのだった。
この関係もいずれは終わってしまう。
私の指導がなくなれば彼女は私以外の艦娘達とも多くの時間を過ごす事になるだろう。
私が戦闘をほとんど出来ない事も直ぐに知られる事になる。
そうすれば瑞鶴は私のそばを離れて行ってしまうかもしれない。
瑞鶴は最終的に私よりも強くなって、この鎮守府になくてはならない存在になるだろう。それは今まで彼女の訓練を見て来た私が保証する。彼女はとても優秀だ。
何だか大切にしていたものが手の届かない所に行ってしまうみたいで、私は胸が締め付けられる感じがした。

いつ以来だろうか。
自分の欠陥を、これほど忌まわしいと思うのは。

ーーーあぁ、私はどうしようもなく、他の加賀とは違うのだ……

０７話

７話

私が体調不良を感じ初めてから少し経ち、季節はもうすぐ梅雨に入り洗濯物が乾かなくなる時期になってくる。部屋干し生乾きの匂いは好きじゃないが、乾燥機を使うと服が痛むんだよなぁ。

瑞鶴の地上での発着艦訓練中、頭を悩ませながら彼女の様子を見ているといつもの様に話しかけて来た。

「うーん……加賀さん、今のどうだった？」

「……そうね。特にもう直す所はないと思うわ。この訓練もそろそろ終わりかしら」

「あ、ありがとう。でも、私的にはまだ少し足りないのよね」

「そうなの？」

「なんか加賀さんが見せてくれたお手本と違うのよ。もっと、こう、何というか、凛々しさと美しさが足りないと言うか……」

「何よそれ。私はそんな凄そうなものは出してないわ」

「出てるの！　加賀さんは私の理想なんだから。　私も出来るようになりたい！」

「理想って……あなたは翔鶴の妹なんだし、練度を見ても目指すのは翔鶴でしょう」

「確かに翔鶴姉も理想だけど、私が目指すのは加賀さんなの！」

「そ、そう。それ翔鶴には言わない方が良いわよ」

「もう言った。拗ねられて大変だった」

「あなた達本当に仲良いわね」

「でしょ？　でも、何で出来ないんだろうなぁ……」

「私から見ればもう出来てるんだけど」

「うーん……」

「そろそろ次の訓練を始めても良さそうね。よく分からないけど、足りない気がするのなら平行してやっていきましょう。基礎訓練はやればやるほど為になるから」

「分かった。次は海上での発着艦訓練だっけ？」
「ええ。海上の移動訓練と地上の発着艦訓練の成果が試されるわね。今の瑞鶴には余裕だと思うけど」
「そう、かな？　そう言ってもらえると嬉しいけど……でも気は抜かないわ。慢心するのはダメだもの」
「よく分かってるじゃない」
　正直、今の彼女ならすぐに終わってしまう訓練だと思う。最初こそ慣れが必要だが、それさえつかめれば苦労しないはずだ。
　始めても数日で終わってしまうだろうし、今の内に赤城さんの訓練に関しても少し説明しておこう。
「瑞鶴、この訓練が終わったら執務室に行くわよ。今後の指導内容について改めて説明しておくわ」
「……分かった」
　その後、訓練時間いっぱいまで彼女は発着艦訓練を行なっていた。

　今私は執務室で瑞鶴と向かい合っている。
　窓の外は雨が降り出し、少し先がぼやけて見える程だ。私は部屋干しが決まった事にゲンナリしながらも瑞鶴に今後の指導の説明をしていた。
「以上が明日から始まる海上での発着艦訓練です。慣れればすぐに終わる訓練だから数日で終わると思うわ」
「分かった。慣れればいいのね」
「それと最初にも説明したと思うけど、その訓練が終わったら私は指導役から外れます。その後の訓練は赤城さんが指導役となって、海上での索敵や航空戦などの訓練が始まるはずです。近い内に彼女から訓練についての説明があると思うわ」
「赤城さんが指導役に……」
「何か質問はある？」
「……ねぇ、加賀さん」

「なに？」
「……なんで加賀さんが指導してくれないの？」
「えっ？」
「なんで指導役が加賀さんから赤城さんに変わるの？」
「それは最初に説明したでしょう。もともとそういう予定だったのよ」
「でも、わざわざ指導役が変わるって事は何か理由があるんでしょう？」
「……知ってどうするの」
「私に原因があるのなら、治すように努力する。私は最後まで、加賀さんに指導して貰いたいから」
「悪いけど、それは出来ないわ」

私は瑞鶴の目から視線を逸らして言った。
「私は最後まであなたの指導をする事はできない。赤城さんが指導役になる事は決定事項よ」

少しキツい言い方をしてしまったかもしれない。
しかし、私も出来る事なら最後まで瑞鶴を指導したいのだ。ただ、私の欠陥がそれを許さない。
本当の理由を言えない事に罪悪感で潰れそうになる。いや、それは違うな。言えないのではなく、言いたくないのだ。
ーーー本当の私を瑞鶴に知られる事が怖い。
彼女は欠陥がある私を受け入れてくれるだろう。今まで彼女を見てきて、それくらいの事は分かる。彼女は優しいし、そんな事で付き合い方を変えるような性格ではないだろう。
それでも、それでもやはり、私は怖い。
私を慕ってくれる彼女に。
私に懐いてくれる彼女に。
私の料理を美味しいと言ってくれる彼女に。

私を理想として目指すべき目標としてくれる彼女に。

ーーー失望され、距離を置かれる事が、私は堪らなく怖い。

いつから私はこんなに臆病になってしまったのだろうか。

彼女の目が見れなくて、今度は顔ごと逸らしてしまう。

「……なんで？　せめて理由を教えてよ」

「理由は言えないわ。これは私だけの判断ではありません」

「それじゃ納得できない！」

「わがままを言わないで。私からは言えません。でも、いずれはあなたも知る事になります」

「私は！　今!!　知りたいの!!」

「落ち着きなさい」

「じゃあ教えてよ!!」

もし、もし私に欠陥がなくて正規空母として戦えたとしよう。それでも彼女の事を考えるのならば、私が指導するべきではない。

彼女は艦娘としてとても優秀だ。とても優秀なのだ。私なんかとは違うのだ。

「今日はもう部屋に戻りなさい」

「……なんで……どうしてよ……私が優秀じゃないから？　私の事が気にくわないの？」

「違います」

「でも私には言いにくい事なんでしょ!?　はっきり言いなさいよ!!」

いつの間にか瑞鶴は泣いていた。

彼女はどこまでも私に対して正直で真っ直ぐだ。

今はそれがとても羨ましい。私は誰かに対して彼女ほど正直になれない。

「……私はあなたみたいにはなれない。一緒にしないで」

「っ!!　もういい!!!」

瑞鶴は泣きながら執務室を出て行ってしまった。
乱暴に閉められたドアを見て、私はため息をついた。
はぁ……やってしまった。
こんなつもりじゃなかったのに……。今から謝りに行こうか。いや、今行っても冷静に話し合いは出来ないだろう。
感情的になってしまうなんて私もまだまだだ。
瑞鶴、泣いていたな。
大丈夫だ、彼女には姉の翔鶴がいる。
嫌われてしまっただろうか。
大丈夫だ、彼女はこんな事で人を嫌いになったりしない。
……ああ、ダメだ、さっきから胸が痛い。
どれだけ自分に言い訳をしても、この痛みは消えてくれないらしい。
なんだか疲れた。何もしたくない。今日の仕事全然終わってないのに。
いつも執務に使う机に座り、寄り掛かるように体勢を崩す。このまま寝てしまおうか。

そのまま目を閉じようとした時だった。
鎮守府内に警報が鳴り響く。これは緊急避難警報だ。出撃が認められていない者は地下に避難する必要がある。
緊張が体を駆け巡ると同時に執務室の電話が鳴り響き、私はそれに応答する。
「はい、秘書艦の加賀です」

ーーーーー

私は出撃する準備を整えて、ドックに立っていた。第1艦隊と第3艦隊は既に出撃している。私は入渠中の子がいる第2艦隊の穴を埋

める形で出撃する事になった。かなり昔に自分で開発して良く使用していた副砲を、今日久しぶりに装備した。敵へのダメージは少なく意識を逸らす事くらいしか出来ないが、無いよりはマシだ。異常がない事を確認し、左手に装備した副砲の背を撫でながら、私は先ほどの連絡を思い出していた。

この辺りにある鎮守府一帯に、複数の深海棲艦の艦隊が攻めて来ている。

その一部を隣の鎮守府の艦隊が遠征任務の帰りに偶然発見した事がきっかけだった。連絡を受けた司令部はすぐに長距離索敵を開始、かなりの数の敵艦隊がこちらに向かって来ている事が判明した。大本営はすぐに緊急事態を宣言し、離れた場所にある各鎮守府から増援を送ってくれているが、到着までは時間が掛かるだろう。

それまでは自分達のみで鎮守府の防衛をしなければならない。

準備が出来て集まって来た第2艦隊の子達を見ながら、私は先ほど泣かせてしまった瑞鶴の事を思う。

瑞鶴はまだ出撃が認められていない。彼女はちゃんと地下に避難が出来ただろうか。第1艦隊が出撃する前に翔鶴から聞いたが、瑞鶴が出撃すると聞かなかったので翔鶴が気絶させて地下に避難する子達に任せて来たらしい。なんともバイオレンスだが、そうでもしないといけないくらい瑞鶴も必死だったのだろう。

ダメだ、こんなに気持ちが沈んでいたら、戦闘どころではない。

いつも通り余計な事を考えよう。しかしそんな急には思いつかず、思考はまた瑞鶴の事を考えようとする。よし、分かった。無事に帰れたら瑞鶴に先ほどの事を謝りに行こう。ここでフラグを建てておく。こんな時にフラグを建てたら本当に帰ってこれなくなる気もするが、先ほどよりはマシだ。

私が沈んだ気持ちを無理矢理高めていると、第2艦隊の旗艦である神通が話しかけて来た。

「加賀さん、みんな揃ったのでそろそろ出撃しようと思うのですが」

「まだ卯月がいないみたいだけど」
「彼女は先ほどから榛名さんの後ろに隠れています」
「分かりました。私はいつでも大丈夫です。あと卯月、私に何か悪戯したら気絶するまでくすぐります」
「そ、それはもう勘弁だぴょん。この間みたいにみんなの前で喘ぐのは恥ずかしいぴょん……」
「あの時の卯月は超セクシーだったネー！　思わずドキドキしてしまったデース！」
「あの時の金剛お姉様、顔が真っ赤でした」
「それは榛名も同じデース。川内も見てましたよネ？」
「見てた見てた。あれは瑞鶴が着任した時だっけ。周りの子達もみんな顔赤くしてたよ。加賀さんも容赦ないよねー」
「あれは新人を騙した事に対する罰則です。神通も何かあったら同じ事をすると良いわ」
「今度から何か悪戯された時はそうします」
「うぅ、しばらくは何も出来ないぴょん……」
「それにしても、加賀と出撃するのは久しぶりネー！」
「那珂が着任する前は良く一緒に出撃してたけどね。加賀さんを守りながらの夜戦は緊張感あって良かったなー」
「私は生きた心地がしなかったわね。夜戦なんてもう一生したくないわ」
「そんな事言って、その副砲で援護してくれてたの覚えてるぴょん」
「私と金剛お姉様が中破した時ですね。懐かしいです。あの時は卯月ちゃんがいて助かりました」
「昔話もいいですが、そろそろ出撃します。みなさん、用意はいいですね。……第2艦隊、出撃いたします」
　久しぶりの出撃で少し緊張していたが、彼女達との会話で大分緊張がほぐれた。もしかしたら卯月はその為に悪戯をしようとしたのかもしれない。
　私は艦載機の代わりに積んである弾薬と魚雷を確認しながら、彼女達の後に続いた。

「一航戦、出撃します」

０８話

８話
※グロテスクな表現がありますので苦手な方はご注意下さい

酷かった雨はいつの間にか止んで曇り空が続く中、私は第２艦隊の皆と海の上を進んで行く。
通常なら編成されないような組み合わせであるこの艦隊は、元は私が着任した前後からいるメンバーの寄せ集めだった。私は第１艦隊に所属していた事もあるが、赤城さんが着任して第１艦隊の座を譲ってからはこの第２艦隊で出撃するようになっていた。本来ならもっと良い編成にするべきなのだろうが、このメンバーはお互い付き合いが長い為そのままの編成を今も維持している。私が出撃しなくなってから那珂が入った以外、メンバーは変わっていなかった。
私達の周りには数え切れないくらいの深海棲艦の死体がある。全て我ら第２艦隊が倒した敵艦隊だったものだ。と言っても私は後ろで補給をしていただけだが。１機しかない私の艦載機など、とっくの昔に落とされている。
周りを索敵しながら司令部と連絡を取っていた神通が全員に言う。
「この辺りの敵艦隊は全て倒せたみたいです。鎮守府近くで警戒していた天龍さんの第８艦隊が艤装を破壊されて、交換と補給の為に一時帰港しているようですが、付近の敵艦隊は全て撃破済みだそうです。他の艦隊は引き続き交戦中との事です」
「手応えがないネ。もっとストロングな奴はいないのデスか？」
「金剛さん。今回は質より数で攻めて来ている様ですから気を抜かないで下さい」
「神通だって不満そうネー」
「ここは夜を待って夜戦にしようよ！　その方が絶対楽しいって！　ねぇ、聞いてる？」
「榛名も前に出たいでしょう。私のせいでごめんなさいね」
「加賀さん、気にしないで下さい。榛名は加賀さんを守る事が仕事で

す。補給が海上で出来るというのは、この上ないアドバンテージですから」
「そうだぴょん。おかげでうーちゃん、主砲も魚雷もどんどん撃って、敵を沈められるから気持ちいいぴょん！」
「あまり無理しないのよ？　駆逐艦は装甲が薄いのだから」
「加賀さんは無理してないぴょん？」
「このくらい余裕です」
「神通、これからどうするの？」
「他の艦隊へ加勢に行くように指示が出ています。みなさん補給は済ませましたね？」
「神通、今の補給で載せてきた弾薬は使い切ったわ。魚雷も僅かしか無いから、私は一度鎮守府に帰って補給を行なってから戦線へ復帰します」
「分かりました。榛名さんを護衛に付けます」
「いいえ、それにはおよびません。１人で大丈夫よ」
「それでは危険です」
「そうです、榛名が護衛致します！」
「鎮守府までの海域は既に掃討したのでしょう？　護衛はいりません」
「何かあったらどうするんですか！」
「神通、榛名、目的を忘れてはダメよ。いま必要なのは兎に角たくさんの敵を倒す事。それには出来るだけ多くの手数が必要でしょう？」
「……分かりました。榛名さんは私達と一緒に来て下さい。加賀さんは鎮守府で補給を行い、その後は第８艦隊に護衛をして貰いながら戦線に復帰して下さい。鎮守府へ帰る時はともかく、戦線へ復帰する時は護衛を付けて貰います」
「分かりました。そこは私も妥協します」
「……加賀さん、無事でいて下さいね……」
「榛名は過保護ね。心配いらないわ」
「それでは我々第２艦隊は、これより南西で戦闘を行なっている第４艦隊の加勢に行きます。着いて来て下さい！」

私以外の第２艦隊の皆は、そのまま進路を南西に取り、水平線の向こうへ消えていった。榛名は最後までこちらを見ていたが、そんなに私は頼りないだろうか。確かに昔はよく被弾して彼女に泣かれていたが。

私は鎮守府に向けて進路を取る。先ほど皆に補給をした事で弾薬は無くなり、魚雷が数本だけ残っている。これだけでは駆逐艦にさえ１回分の補給もしてあげられない。急いで鎮守府に戻る為、私は敵の死体を避けながらも最大戦速で海上を進んで行った。

ーーーーー

第２艦隊の皆と別れてしばらく経ち、天龍率いる第８艦隊が戦闘を行なっていた海域に差し掛かる。ここも周りは敵の死体だらけで酷い有様だ。これだけ鎮守府に近いと敵のほとんどは主力を失った手負いの艦隊だろうが、これだけの敵を相手にして彼女達はよく無事だったな。第６駆逐隊の４人も強くなっているという事か。鬼ごっこばかりしていた訳では無いんだな。

敵の死体を避けながら進んでいると、急に体が重くなって来た。頭痛とめまいが酷く、意識が薄くなって行く。

……しまった。普段の症状を重くした感じだ。もう体が限界がなのかもしれない。最近は寝る時間もあまり取れていなかったからなぁ。あと少し進めば鎮守府が見えてくるはずなのに。

なんとか意識を繋ぎ止め、体を動かして膝を着きそうになるのを我慢する。

何も出来ないのにここへ留まるのは危険だ。

なんとか前に進もうとした時だった。

私は宙を舞っていた。

いきなり左から衝撃が来て、体が吹き飛ばされる。そして何が起きたかわからないまま海面に叩きつけられた。
その衝撃で薄れていた意識が戻ってくる。どうやら私は攻撃を受けたらしく、左肩にある飛行甲板が半分無くなっていた。これが右だったら轟沈していたかもしれない。破れた服に滲んできた血を見てやっと痛みを知覚する。
吹き飛ばされた方向の反対側を見ると、手負いの戦艦ル級がこちらに主砲を向けていた。
接近に気付かず発砲音も聞こえないくらい意識が薄くなっていたのか。でもこれは運が良かったのかもしれないな。意識が薄いまま何が起きたのかも分からずに轟沈なんて絶対に嫌だ。
無線で救援を呼ぼうとしたが、先ほどの衝撃で壊れてしまったようだ。雑音が酷く通信できる状態では無い。これで救援は呼べないだろう。
無線を諦め、私は空に向けて信号弾を発射する。これは全員に1丁ずつ配備される単発の物だ。鎮守府はまだ信号弾が見える範囲に無いが、もしかしたら帰港途中の艦隊がどこかに居るかもしれない。肉眼で見える範囲にはいないようだが。

私はル級と対峙しながら考える。
手負いである事と単艦でいる事から他の仲間は居ないのだろう。
ここに居る理由はどうあれ、このル級を鎮守府に向かわせてはならない。避難しているとは言え今の鎮守府には非戦闘員もいるのだ。何かの拍子にル級の主砲が飛んでこようものなら、人は愚か建物も吹き飛んでしまう。
私はル級の砲撃を避けながら副砲で応戦し始めた。今の私の装備だとル級を沈める事は出来ないが、時間を稼ぐ事は出来る。幸い敵は手負いであり、主砲の2門しか使用できない様だ。
先ほどの信号弾で味方の誰かが来てくれるのがベストだが、可能性はあまり高く無い。戦線に出ている艦隊が補給の為にここを通り掛

かるのを待つのが現実的だろう。それまで私が沈まない事が前提となるが、ル級を鎮守府に近づけさせない為にはそれしか思いつかなかった。

敵は大ダメージを与える主砲でこちらを狙い、私は碌なダメージを与えられない副砲で終わりが見えない時間稼ぎを行う。思った以上に精神的疲労があった。敵の砲弾が近くに着弾する度に冷汗が吹き出し、恐怖が体の動きを鈍らせる。私は後一発貰えば沈むかもしれないのだ。それがまた精神的疲労となり、悪循環に陥ってしまう。それでもなんとか被弾を避けながら、私は時間稼ぎに徹した。

ーーーーーー

時間稼ぎを始めてからどれくらいの時間が経ったのだろうか。体感的には永遠にも感じられるが、周りの死体の沈み具合を見る限り、あまり時間は経っていないようだ。途中何度も砲弾が体を擦りながら海に着弾し、発生した水柱が体を濡らした。既に精神的にも身体的にも限界だった。

そのせいだろうか、一瞬意識が飛んでしまい、気付いた時には敵の砲弾が目の前にあった。

ーーー衝撃、轟音、熱、光と共に世界が回転する

砲弾はそのまま腹部に直撃し、私は後ろに吹き飛んだ。再び意識が飛びそうになるが、体の痛みがそれを邪魔している。息が出来ないし、体は動かない。しかし海面に半分沈みながらも、私は意外にも冷静に自分の状態を把握していた。

体のあちこちにある大きな傷から血が流れ、火傷も酷い。骨もおかしくなっている様だ。砲弾が直撃した腹部は特に酷く、皮膚や筋肉、

その下の組織が破れて、そこから腸か何かの内臓がはみ出していた。
控えめに言って大破。体が半分沈んでいることから、轟沈までは時間の問題だろう。先程から段々と自分が海に沈んで行っている事が分かる。体が酷く寒い。
ああ、私もここまでか。
私以外の子達は無事だろうか。またみんなに迷惑を掛けてしまう。第2艦隊の皆にはあんな大見栄を切ったのに。次の秘書艦は誰だろうか。もう私は頑張らなくてもいいのか。やっと楽になれる。
でも、なんだかんだ言ってあの鎮守府の生活は楽しかったなぁ……

鎮守府のみんなの顔が浮かんでくる。私も着任して長いし、たくさんの艦娘を見て来た。
最後に瑞鶴の顔が浮かんで来る。結局、彼女とは喧嘩別れをしてしまった。最後に謝りたかったが、もうそれは叶わないだろう。

……体から熱がなくなって行く。海はこんなにも冷たかったのか。

瑞鶴は私が居なくても大丈夫だろうか。大丈夫だろうな。彼女は優秀だし、赤城さんや翔鶴達がいる。何を心配する事があるのか。

……痛みが和らいで来た。感覚が麻痺して来たのだろうか。

瑞鶴には彼女が着任した時から期待しているので頑張って欲しい。
この目でそれを見られないのは残念だが。

……もう目を開けていられない。まぶたがすごく重い。

瑞鶴は赤城さん達正規空母に指導してもらえれば、あっという間に即戦力だ。
経験を積めば主力艦隊でトップを目指す事も可能だろう。

……うん？　指導してもらえれば？

何を言っているんだ私は。
それは鎮守府があって、瑞鶴もみんなも無事だった時の話だろう。
今、私の前に居るのは何だ。鎮守府に対して攻撃をしてくる敵だ。
このままこいつが鎮守府まで行ってしまったらどうなる。建物が壊れるだけならまだ良いが、それに巻き込まれた人達はどうなる。提督が、皆が、瑞鶴が、……死んでしまうかもしれない。
それはダメだ。瑞鶴が死んでしまうなんて絶対にダメだ。
私は瑞鶴が倒れて動かない姿を想像してしまう。
その光景は自分が死ぬより、とても、とても、恐ろしく思えた。

何をしているんだ私は。
呑気に沈んでいっている場合ではない。
まだ完全に沈んでいないだろう。
まだ何とか意識はある。
五感だってギリギリ失っていない。
手足も全部付いている。
それに最初に自分で言ったではないか。こいつを鎮守府に向かわせてはいけないと。
動悸が激しくなり体に熱が戻ってくる。目を見開き前を睨みつける。動かなかった手足が動く様になり、痛みを感じながらも海面から体を持ち上げる。

腹部から内臓がはみ出しているが、今は構っている余裕がない。
白と青の服はもう服として機能しておらず、体に引っ掛かっているだけだ。血のせいで元の色を失い、赤とドス黒い紫に変色している。

私は敵を見据えた。

「……ここは、譲れ、ません」

ーーーこいつはここで沈めないと

海面に上がった私はその場で立ち上がり横に移動する事で、私にトドメを刺そうとしていたル級の砲撃をギリギリで避けた。
喉の奥から何かが込み上げて来て思わず吐き出してしまう。口元を腕で拭うと、べっとりと血が付いてしまった。
構わず移動を続けると、周りの死体の1つに何か長い物が刺さっているのを見つけた。持ち手の棒が半ばから折れているが、これは龍田の艤装である槍だったはず。そういえば艤装の損壊と補給で一時的に帰港していると神通が言っていたな。
反射的にそれを引き抜くと、副砲を装備していない手で握る。
私は接近戦が得意ではないが、昔は攻撃手段を得る為に手を出した事もあった。目くらまし程度は出来るかもしれない。
そのまま次弾を装填しているル級に近づいていく。
ル級の主砲が仰角を調整する必要がないくらいまで近づいた時、反射的に首を傾けた。刹那の後、そこを砲弾がすり抜けて行き、髪の毛が数本持っていかれる。危なかった。でも、これはチャンスだ。
一気に加速し、ル級の目の前まで接近する。相手もここまで接近してくるとは思わなかったのか動きが鈍い。槍を敵の首に突き出すが、ギリギリで避けられる。惜しい。
ル級は装填が終わった主砲をこちらに向けてくるが、私は逃げようとする本能を抑えつけ、ル級へさらに接近した。主砲の砲身に手が届く距離まで近づき、手を当てながら無理矢理に力を入れて、それらを

横方向へ押す。その直後に主砲は火を吹いたが、私には当たっていない。
力比べをしながら暫く睨み合った後、私は持っていた槍を片方の砲口に突き刺して離脱する。直後に砲撃しようとしたル級は槍が刺さったままの砲身を暴発させてよろめいていた。
咄嗟に私は格納庫に積んであった魚雷を右手に2本持ち、そのままよろめいたル級に叩きつける。
至近距離で爆発した魚雷の衝撃に吹き飛ばされるが、何とか意識を失う事は避けられた。ル級も私とは反対側に吹き飛ばされて海面に倒れている。左右の主砲の内、左の砲身が暴発で裂けているが、右の砲身は健在だ。まだダメージが足りないのなら、次は倍の魚雷を叩きつけてやる。先程から動悸がうるさくて周りの音が聞こえない。
魚雷を取り出そうとして、自分の右腕が無い事に気付いた。肘辺りから先が千切れ飛んでいるが不思議と痛みは感じない。
右腕が無いなら左腕だ。邪魔な副砲を投げ捨て、4本の魚雷を取り出す。これで載せていた魚雷も打ち止めだ。
視界がボヤけて来ているが、まだル級を倒せていない。
次に砲撃される前に、こちらが攻撃しなくては。
ル級はまだ起き上がっていない。動悸がうるさい。
私は気力を振り絞り、ル級に向かって加速して行った。

しかしル級まであと少しという所で急にスピードが落ちる。
腰に何かが巻きついて私の邪魔をしているようだ。
振り払おうとするが上手くいかない。腰に巻きついている何かは締め付ける強さを増すと、私を後ろに引っ張る。邪魔をするな。後少しでル級を沈められるかもしれないんだ。
右腕が無いので魚雷を持っている左腕の肘を使って引き剥がそうとするが、さらに締め付けられて抵抗される。
引き剥がすのは諦めて無理矢理前に進みル級に近づこうとするが、今度は前に何かが割り込んで来た。それは前から私の体を押して、私をこれ以上進ませない様にしてくる。前と後ろから邪魔をされては

一度進むのを諦めざるを得なかった。
まずはこいつらをどうにかする必要がある。
最初は目の前にいる邪魔者を排除しなければ。
私は段々とボヤけてくる視界にそいつを入れて睨みつける。

そこには見知った顔があった。

駆逐艦不知火。我が鎮守府の第1艦隊に所属する猛者だ。
彼女は私を前に行かせまいと、彼女の小さい体全体を使って私を押し返している。
どうして彼女が私の邪魔をするのか。そう考えると彼女が何かを叫んでいるのが聞こえた。
「かがさ　、　止まっ　くだ　い!!」
「そ　よ、か　さん!これ以　ダメ!!」
よく聞き取れない。
なぜか陽炎の声も聞こえた気がする。
疑問に思い前に進むのを止めると、顔を上げた不知火と目が合う。
彼女は必死な顔で涙を流しながらこちらを見た。五感がクリアになって行く。
後ろから陽炎の声が聞こえて来た。
「不知火！　何してんの！　休んでんじゃないわよ！　早く加賀さんを下がらせないと！」
下を見ると腰に両腕が回されている。後ろから引っ張っていたのは陽炎だったのか。
状態が分かった所で不知火が話しかけて来た。
「加賀さん、今すぐ下がってください」
「ル級を、沈める、までは、下がれ、ないわ」
呼吸が乱れて上手く話す事が出来ない。
「大丈夫です。ル級はすぐに沈みます」
不知火がそういった瞬間、ル級にどこからか砲弾が着弾し上半身を吹き飛ばした。

そうか、陽炎と不知火がいるという事は、第1艦隊の皆も近くにいると言う事か。
それならもう鎮守府は安心だな。私は少し体の力を抜いた。
すぐに腰の腕が解かれると、陽炎も前に来て必死に話しかけて来る。
「加賀さん!!　大丈夫!?　私の事わかる!?　今すぐ鎮守府に運んであげるから!」
「何、言って、るの。大丈夫、よ。1人で、行け、ます」
「ああもう!　全然大丈夫じゃないから言ってるの!!」
「そうです。急がないと死んでしまいます。陽炎、加賀さんを運んでください。私も陽炎ごと曳航します」
「だから、だいじょ…う……ぶ……」
2人に大丈夫と言おうとした所で体から完全に力が抜ける。そのまま後ろへ倒れそうになった所を陽炎に抱きとめられた。
ダメだ。また意識が薄くなって行く。陽炎と不知火が何か言っているが聞き取れない。
何で2人ともそんなに泣いてるんだ。
やっぱり自力で鎮守府までは行けそうにないから、運んでくれると助かる。

段々と薄くなる意識の中で思う。
やはり今回も、私は役に立たなかったようだ。
補給艦もどきが戦闘で役に立つはずがない。
私はみんなの役に立つ事が出来ない。
……私は他の加賀とは違うのだから……

ーーー私は意識を失った。

０９話

９話

意識が戻り最初に見た光景は、医務室の天井だった。
窓から光が差し込んでいる。窓際のベッドに寝かされているらしい。
その窓の反対側は仕切りのカーテンが掛かっていた。
ドックで目を覚ますと思っていたのだが、ここにいると言う事は何か異常があったのだろうか。
体を動かそうとするが、目以外はほとんど動かないし感覚もほぼない。声を出そうとしても乾いているのか、掠れた感じになってしまう。誰かが来るのを待つしかないか。

私は最後の記憶を思い出す。
深海棲艦の襲撃があって出撃し、１人で鎮守府に戻る際にル級と戦った。結局私では倒しきる事が出来ず、最後は陽炎と不知火の前で倒れたのだったか。現状を鑑みるに、彼女達は私を鎮守府まで運んでくれたのだろう。後で礼を言っておかなくては。
それにしても改めて思い知らされる。やはり私は戦闘で役に立たない。今回も皆に迷惑を掛けてしまった。特に第１艦隊には本来ならやらなくてもいい事をさせてしまっている。その中でも陽炎と不知火には私を止めて、鎮守府まで運ぶという力仕事までして貰った。本当に自分が嫌になる。
戦闘で役に立たないからこそ他の事で役に立とうとして来たが、それを抜きにしても今回のこれはあまりにも酷い。

ル級との戦いからどれくらいの時間が経ったのだろうか。今の姿勢で見れる範囲に時計は無いが、窓から差し込んで来る光の方向からして０９００くらいだろう。昨日出撃したのが１１００くらいだったから、ル級と戦ったのが１６００くらいだとすると約１７時間も寝

ていた事になる。これはマズイ。急いで仕事をしなければ大変な事になってしまう。
時間的に援軍が来ているはずだから戦力的な心配はしていないが、執務に関しては別だ。食事の用意などは1日くらい各自でどうにか出来ると思うが、執務は1日しないと大変な事になる。
起きようとするが体が動かないので何も出来ない。仕方ないので誰か来るのを待って執務室に連れて行ってもらおう。
私は自力で動くのを諦めると、誰かが来るまでゆっくりする事にした。

外は砲撃音がしておらず、静かな時が流れている。時折楽しそうな声が聞こえるから、無事に深海棲艦の脅威は去ったという事か。
しばらくするとまた眠くなって来たが、誰かが来るまで寝ないように我慢する。
それにしても喉が渇いた。水が飲みたい。
皆は、彼女は、無事なのだろうか。
1人で考えていると、医務室に誰かが入って来た。
「そろそろ点滴の交換時間ですね」
声を聞く限り、明石が来たらしい。
私は掠れた声で彼女を呼ぶ。
「あ、かし」
「っ！　加賀さん！　気が付いたんですね！　」
彼女はカーテンをめくり私が気が付いた事を確認すると心配そうに聞いてきた。
「気分はどうですか？　痛いところないですか？」
「水を、ちょうだい」
「水ですね！今持って来ます！」
明石はすぐに水を用意すると、私を起こして飲ませてくれる。首も自分で動かせないのは辛い。喉に潤いが戻って来て、声の調子も良くなった。
「ありがとう。だいぶ楽になったわ」

「いえいえ、気分はどうですか？」
「あまり良くは無いわね。それより皆は無事なの？」
「無事です。大破以上は加賀さんだけです」
「そう、よかった」
　私は胸に安堵感が広がるのを感じた。皆も彼女も無事らしい。
　そして1番気になっていた事が分かれば、次に気になっている事に気持ちが行く。
「ところで執務室に連れて行ってくれる？　体が動かないし、どうも感覚があまりないのよ」
「いいですけど、何するんですか？　報告なら提督をここに呼びますよ？」
「急いで仕事をしないと」
「何言ってるんですか!?　お願いですから寝ていてください！」
　明石はそう言うと私をベッドに寝かせた。体が動かないのでそれに抗えず、横になった途端に強烈な眠気が襲って来る。まぶたが重い。
「ほら、もう限界じゃないですか。体が睡眠を要求しているんです、今は寝てください。続きは次に起きた時に聞きますから」
　私は明石に何か言おうとしたが、眠気に負けてそのまま目を閉じた。

ーーーーーー

　次に私が目を覚ますと、窓から差し込んでくる光は夕焼けのオレンジ色に染まっていた。
　ベッドのすぐ側には明石が居て何かをしており、彼女は私の視線に気付くと申し訳なさそうに聞いてくる。

「あ、すみません。起こしちゃいましたか？」
「いえ、大丈夫。今何時？　かなり寝てしまったみたいね」
「ちょっと待ってくださいね。点滴の交換だけ先にやらせて下さい」
「私、点滴なんてしてるのね」
「そうですよ。毎回私が責任を持って交換しています。ところで気分はどうですか？」
「おかげでだいぶ良くなったわ」
「それは良かったです。体はどうです？　動きますか？」
少し力を入れてみると、まだまだ動きづらいが一部を除きなんとか動くようだ。感覚もだいぶ治ってきている。
「大丈夫みたいね。ただ右腕だけ違和感があるわ」
「……加賀さん、落ち着いて聞いて下さい。……残念ながら加賀さんの右腕は、まだ再生出来ていません」
「……そう」
それは修復剤でも再生出来なかったという事だ。ごく稀にだが、長期的な疲労が抜けていない状態で負傷すると、修復剤の効きが悪くなるという報告がある。その場合、治りきっていない負傷箇所は普通の人間と同じように治療していかなければならない。
今回、右腕の再生は絶望的と見ていい。人間は失った腕が再生したりはしないからだ。
私は苦労して何とか右腕を上げてみるが、そこには包帯に巻かれた肘辺りまでだけがある。その先には何も無かった。ル級との戦闘中はあまり気にならなかったが、改めて見ると違和感があるな。
「加賀さん、気を落とさないでというのは無理かもしれません。でも諦めないで下さい。私達がいつか必ず治してみせます」
「……ありがとう。それなりに期待はしているわ」
「はい。それで今の時刻ですが、１７０５です」
「そう。そんなに寝ていたのね。そろそろ執務室に行かないと本格的にマズイわ」
「大丈夫ですよ。確かに最初はみんな死にそうでしたけど、最近は慣れて来ていますから」

「？　どういう事？　執務は私の仕事です」
「？　ああ、もしかして加賀さん、運ばれて来たの昨日だと思ってますか？」
「違うの？」
「違います。加賀さんが運ばれて来たのは３５日前、１ヶ月以上前ですね」
「……へ？」
「修復剤での治療を試みた後はこちらで集中治療を受けてもらっています。詳しい説明を聞かれますか？」
「……ええ、お願いするわ」
　私は混乱する自分を落ち着ける意味も兼ねて明石に説明を頼んだ。
「まず、加賀さんが運び込まれた時ですね。気になるでしょうから少し前から説明します。第１艦隊が帰港中に打ち上げられた信号弾を発見、救援に向かうも会敵し中断、戦闘終了後に陽炎さんと不知火さんが先行し加賀さんを発見、大和さんがル級を撃破、陽炎さんと不知火さんが加賀さんを緊急搬送、ここまでで何かありますか？」
「……大丈夫よ」
「その後ですが、搬送後に加賀さんを緊急入渠、高速修復材が必要と判断し使用、５日間に渡り入渠を続けるも腹部と右腕の負傷箇所が完全には回復せず、医務室での集中治療に移行、外科手術と１日４回の点滴による投薬にて経過を観察、というのが大まかな流れです。そして今日は医務室に移行してから３０日目ですね」
「……そう」
「攻めて来た深海棲艦に関しては、加賀さんが搬送された２日後には掃討が完了しました。各鎮守府自体への被害もありません」
「……そう」
「それ以外の執務などに関しては提督から詳しい説明があります」
「……」
「……大丈夫ですか？」
「……ええ、大丈夫」
「……そうですか。ところで加賀さん、今回修復剤が効かなかった事

と長期間に渡り目が覚めなかった事は長期間の疲労が原因です。何か心当たりはありますか？」
「……最近忙しくてあまり寝る時間が取れなかったからかしら」
「いつからです？　睡眠時間は？」
「間宮さんの出張が決まってからね。３０分くらいよ」
「……それが原因の１つで間違いないです。他には？」
「特に思い浮かばないわ。でも元々あまり寝る方じゃないから、これが原因とするのは早計じゃない？」
「どう考えても睡眠不足が原因の１つであることは確かですよ。いつもどれくらい寝てるんですか」
「2、3時間かしらね」
「……もうそれしか考えられません」
「これくらい問題ありません」
「問題しかないです。……加賀さん、いつもそれしか寝られないくらい仕事があったんですか？」
「本当は効率良く処理したいのだけど、なかなかうまくいかなくて」
「あの人たちが死にそうになる訳です……。加賀さん、ちゃんと寝ないと疲労は回復しないんですよ？　なんで周りを頼らなかったんですか？　少なくとも私がそれを知っていれば、絶対に工廠の仕事は手伝ってもらいませんでした」
「……」
「加賀さんは私達が開発に時間を使える様に、毎日工廠の仕事を手伝ってくれてましたよね。もちろんそれは感謝しています」
「……」
「加賀さん、今、私怒ってるんですよ」
「……悪かったわ」
「加賀さんにだけじゃありません。それに気付かなかった自分に対してもです」
「あなたは気付いたでしょう？　前に私に疲れていないか聞いて来た事があったじゃない」
「あの時は確信が持てませんでしたし、結局その後は気付かないまま

こうして加賀さんの疲れが溜まってしまいました」
「それはあなたのせいではありません。私が気付かれない様にしていたから……」
「だから私は加賀さんにも怒っているんです！　どうしてそこまでして自分を追い詰めるんですか！　どうして周りを頼らないんですか！　私は加賀さんなら自分で考えて体調管理くらい出来ていると思っていました。でも加賀さんは仕事優先で自分の事なんか全然考えてなかったわけですよ！」
「ご、ごめんなさい」
「修復剤の効きが悪かった時、私がどんな思いだったか分かりますか!?　どんなに高速修復材を使っても、入渠時間を掛けても、どれだけやっても回復しなかったんです!!　1日に何回も鎮守府のみんなが私に加賀さんの容態を聞いてくるんです！　失敗すれば死ぬんです。私のせいで、加賀さんが、死んで、しまうと、思うと、手が、震えて……」
「……ごめんなさい」
「……すみま、せん。……熱くなりすぎました。本当は工廠の仕事を手伝ってくれたお礼を言わないといけないのに……。それに、疲労に気付かなかった私にも落ち度はあります。申し訳ありませんでした」
そう言って明石は泣いてた顔を隠す様にして頭を下げた。
彼女がこれほど感情的になるのは初めて見たし、正直意外だった。彼女は精神面が落ち着いているのに加えていつも冷静なので、怒るとしても静かに怒るタイプだからだ。それほど精神的に辛かったのか。
「……なんというか、私もこれからは気を付けるわ」
「……もう、それはやらない人の常套句ですよ。まあ今は良いです。簡単な検査の後に提督を呼びますから、来たら説明を受けてください」
私は明石から問診と簡単な検査を受け、右腕と疲労以外は大丈夫だろうと言われた。精密検査は明日以降にするそうだ。
提督はその後、すぐに医務室へ駆け込んで来た。

ーーーーーー

窓の外は暗闇が支配していて何も見えない。今夜は月と星は出ていないようだ。

私は誰もいなくなった医務室のベッドの上で1人横になっている。

先ほど提督の説明を受けてから、私は呆然と天井を見つめる事しか出来なかった。

提督と会った時、彼はまず私に土下座をして来た。いきなりの完璧な土下座は私と明石を黙らせるには十分な物で、しばらく誰も声を発しなかった。

正気に戻った明石が提督に蹴りを入れ、ようやく話が出来る状況になり、提督がベッド脇の椅子に座り改めて謝罪をして来た。

彼曰く、私の仕事量を把握できておらず、それでも加賀さんなら大丈夫だろうと思い込んでいたらしい。それは私も自分から申告しなかったので別に良いのだが、他の子達はそう思わなかったようだ。今私の代わりに仕事をしている子達は、仕事量を見ると提督にキレてから散々説教をして、数人で仕事を回しているそうだ。これはアレだな、私の睡眠時間とかがバレたら私も怒られるパターンだな。

体調不良が見抜けなかった事に関しても謝罪されたが、明石でも見抜けない物を提督に見抜けるとは思わないので流しておいた。

私はそんな事よりも執務や雑務に関する事の方が重要だった。

現在私の代わりに働いているのは5人いるとの事だ。

秘書官を2人にしても全く仕事が終わらず、秘書官補佐をさらに2人付けて、大本営から大淀まで呼び寄せ、やっと回っている状態だそ

うだ。幾ら何でもそれはやり過ぎだろうと思ったが、最初はこれでも死にそうになっていたらしい。ちなみに間宮さんは私が搬送された翌日に帰って来て食堂に立っている。急いで帰るためにわざわざ飛空艇を出してもらったと聞いた。

そして最後に、私は提督と明石に無期限で一切の訓練と仕事を禁じられた。しばらく休息が必要との事だったが、私はそれに対して大きなショックを受けた。

2人が休めというのも分からなくはない。

今回修復材が効かなかった原因が疲労にある以上、休息を取るのは妥当な選択だと思う。

しかしそれはダメなのだ。

それはここに居る私の存在を否定してしまう様で我慢出来ない。

私は建造された当時、深海棲艦に対して劣勢なこの国とそれに属する鎮守府を見て、必死に戦う仲間を見て、そして欠陥がある自分を見て、思った事がある。

ーーーこの場所で役に立たない存在は必要とされていない。私はこの場所に居ていい存在ではないかもしれない。

しかし自分でそれに気付いた時は既に遅かった。

私はみんなと一緒に居たいと思ってしまっていた。この海でまた戦いたいと思ってしまっていたのだ。

私は、この場所に皆と居る事を望んでしまったのだ。

だから私は、誰かに必要とされたくて、自分の居場所を失いたくなくて、皆の役に立つように自分が出来る事は全てやってきた。

それでも結局、それらは自分がやらなくても他の誰かが出来る事で、今は私の代わりに誰かが全て行なっている。

私の存在を肯定していた唯一のものが無くなってしまう。

それが無くなったら、私はどうしてこの場所に居るのか。

私だけ何もしないまま、皆が戦っているのをただ見ていれば良いのだろうか。そんな存在がこの場所に居て良いわけがない。

もう私は要らないのか。

私の居場所を奪わないでくれ。

私は2人に仕事をすると言った。

もう私は大丈夫だ。これ以上休む必要はない。すぐに復帰出来る。腕がないから少しスピードは落ちるかもしれないが、その分時間を掛ければ良い。

しかし提督は首を縦には振らなかった。この鎮守府で一番上に立つ彼の命令には従わなければならない。

彼は私にすぐに忙しくなると言ったが、私にはその場凌ぎの慰めにしか聞こえなかった。

「……そう」

私はそれだけ返すと、退室していく提督を見送る事しか出来なかった。

ーーーーー

明石もいなくなった部屋で、私はただ呆然と天井を見ている。

ル級と対峙した時から薄々分かってはいたのだ。私はこのまま今まで通り鎮守府の生活へは戻れない。

そして1ヵ月以上寝て、提督から休息を言い渡された時に確信した。

私はもうこの場所に居てはいけない。
胸に大きな穴が空いた様な感覚と自身の不甲斐なさにどうしようもなくなり、気持ちが落ち込んでいくのが自分でも分かってしまう。
私はもう何も出来ないのだろうか。何か少しでも私に出来る事があるのではないか。他の加賀ならこんな時どうするのだろうか。
その時ふと思った。
そうだ、他の加賀だ。他の加賀ならこの鎮守府の大きな戦力になる。それは今後とても役に立つ事だろう。私が居なくなれば欠陥など無いちゃんとした加賀がこの鎮守府に着任するはずだ。
私が最後に出来る事は、私以外の加賀がこの鎮守府に着任出来るようにする事だ。

ーーー解体してもらおう。

どうせこんな体ではもう何も出来ない。秘書艦の仕事や艤装関係の仕事、鎮守府の補修も、もう満足に出来ないのだから。
軍属ではなく一般人としてひっそりと暮らそう。未練はあるが時間が解決してくれるはずだ。

私は天井を見ていた目を閉じて、着任してから今までの事を振り返った。
最初自分に欠陥があると分かった時はとても落ち込んだ。
今はもう引退した鳳翔さんに教えを乞い、なぜか下手に出てくる翔鶴に気後れし、陽炎と不知火の面倒を見て、実はバトルジャンキーな数人の子達に振り回されたりした。
人数が増えてきて私が出撃しなくなると、その後着任した私の欠陥を知らない子達に怖がられた事もあった。出撃しないのは戦闘力が高すぎて周りを巻き込むからだとか、目線だけで姫級を倒したとか、少し考えれば嘘だと分かるだろうに。古参メンバーがそれとなく私の事を伝えてフォローしてくれた時は本当に助かった。あの時は卯月が泣いて謝っても尻を叩き続けた。

明石や夕張の作った物が原因で鎮守府が大混乱に陥った事などは数え切れない程あった。
なんだかんだ言って、鎮守府に所属している艦娘とは全員となんらかの思い出がある。特に瑞鶴との時間はやけに鮮明に覚えている。
最後まで正規空母の加賀として戦えなかった事は残念だし、忙しくて大変な日々だったが、とても楽しかった。
もう寝ようと思った時、瞼の裏に瑞鶴の顔が浮かんでくる。
彼女とは喧嘩別れしたままだから次に会う時は少し気まずいな。もう会えないかもしれないが。
せめて基礎指導くらいは最後まで私がやりたかったなぁ。でも赤城さん達ならそれくらい任せても大丈夫なはずだ。一航戦の名は伊達ではない。私は伊達だけど。

もうすぐ彼女に会えなくなる事に胸を裂かれそうになりながら、ふと昔から繰り返し考えてきた事が頭をよぎる。
ーーー何故私は、他の加賀とは違ってしまったのだろうか。

１０話

１０話

翌日、私は明石に起こされて目を覚ました。どうやらまだ疲労が溜まっているらしく、回復には当分時間が掛かりそうだ。
時刻はすでに１０００を回っている。完全に寝過ごした。
明石は昨日意識が戻ったばかりなのだから、と何でもない様に笑っているが、私からすればありえない時間帯だ。
ため息を吐きながら起床して明石に身支度を手伝ってもらう。
外からは明るい光が差し込んでベッド脇にある仕切りのカーテンを照らしている。
今日は雲ひとつ無い快晴になりそうだ。
ベッドで上半身のみを起こして消化の良いものを食べてから、解体に必要な手続きを思い出していると明石が話しかけてきた。
「そういえば、明日から提督は数日の間だけ大本営へ出張に行くそうですよ」
「そうなの。前から時々行ってるようだけど、今回もまたそれかしら」
「大本営って提督達の憧れなんですよね」
「人によるんじゃない？　確かに功績や能力を認められた人しか所属できないし、大本営所属になりたい提督は多いって聞くけど、鎮守府に居たいっていう提督だっているでしょう」
「うちの提督はどっちなんですか？」
「昔から大本営に行きたいとは言っていたけど、皆が心配だからここを離れるのは嫌らしいわ」
「難儀ですねぇ」
明石はそう言って私の点滴を交換し始める。
私はそれを見ながら解体の手順について考えていた。
艦娘を解体をする場合、作業は工廠で行う事になる。今のうちに解体の件を明石には言っておいた方が良いかもしれない。
私が明石に口を開こうとした時、医務室のドアがノックされ、誰か

が入ってくる。その人物はドアを閉めながら明石を呼んだ。
「明石さん、いるー？」
「はーい。ちょっと待ってくださいね」
明石は点滴の交換を終わらせると、カーテンの向こうへと出て行った。
私はそれを見ながら何故か少し緊張している。この声は瑞鶴だ。医務室に来たという事は怪我でもしたのだろうか。
彼女は明石に話しかけている。
「今、大丈夫だった？」
「はい、大丈夫ですよ。いつものですか？」
「うん、加賀さんの様子を聞きに来たわ。まだ意識は戻ってないの？」
「ああ、皆に押しかけられると思って提督と夕張さん以外には黙っていますが、実は昨日気が付いたんですよ」
「ええ!? そうなの!? なんで教えてくれないのよ！」
「そんな風に興奮した人が一度にたくさん来るからです。瑞鶴さんには特別に教えましたけど、まだ他の人には秘密ですよ？」
「わ、分かった。って何で私だけ特別なの？」
「だって、ねぇ……。ここで言って良いんですか？ 加賀さん、今そこのベッドで起きてますけど」
「えっ、今加賀さん起きてるの!? 早く言ってよ！ いや違うそうじゃない待って言わないで！」
そうか。瑞鶴は私を心配してくれていたのか。
瑞鶴の慌てたような声と明石の笑い声を聞きながら、カーテン越しに私は声をかける。
「瑞鶴、私はもう大丈夫よ」
足音で瑞鶴がこちらに近づいて来るのが分かる。
その間隔がこちらに近づくにつれて早くなり、そのままカーテンをめくって中に入って来た。
「「……」」

瑞鶴と無言で見つめ合う。
しかしすぐに彼女は泣きそうな顔になりベッドの脇に近づいてきた。
「……かがざぁん」
「ちょ、ちょっと、何で泣いてるのよ！」
瑞鶴が私の名前を呼んだ時にはすでに彼女の顔は決壊しており、涙がポロポロと頬を伝って流れていく。
彼女の涙を見た私は不覚にも動揺を隠せず、柄にもなく焦ってしまった。
こんな時はどうするんだったか。そうだ、取り敢えず頭を撫でよう。昔から陽炎や不知火などの駆逐艦が泣いた時はよく頭を撫でていた。
私は何とか左手を伸ばして瑞鶴の頭を撫でる。少し無理をしないと届かない距離だが、泣かれ続けるよりはマシだ。
「う〝、ぁぁぁあ！　ががざぁぁん〝！」
なぜだ。泣き止むどころか悪化してしまった。
瑞鶴はそのまま声をあげると私に抱きついてきた。胸に顔を押し付け背中に手を回してくる。
力一杯に抱きしめてくるので思わず口から変な声が出てしまい、明石が何事かと顔を覗かせた。しかし瑞鶴と私の様子を見ると彼女はニヤニヤしながら言ってくる。
「あ、私これから工廠に用事があるのでしばらく外しますね。２時間後くらいに帰ってきます」
「明石、その前に瑞鶴をどうにかして」
「自分でやって下さい。瑞鶴さんは加賀さんの事を心配してほぼ毎日様子を見に来てたんですから」
そう言って明石は本当に医務室を出て行ってしまった。
昨日は瑞鶴にもう会えないかもしれないと思っていたが、まさかこんなに早く会えるとは。それに気まずさを感じる暇も無くこの状況になってしまった。
私はまだ泣いている瑞鶴を片腕で抱きしめ返しながら、彼女をなだ

め続けた。

ーーーーーー

しばらくすると瑞鶴は少し落ち着いてきたようだが、まだ顔をあげられる程ではないらしい。私に抱きついたままスンスン鼻をすすっている。

しかし私は彼女が何とか泣き止んでくれそうで安堵していた。涙で濡れた服が冷たいが我慢しよう。

だがこの体勢は恥ずかしいな。

「瑞鶴、いい加減泣き止みなさい」

「もう泣いてない」

「なら離れなさい」

「ヤだ。離れない」

「……いつからそんなに子供っぽくなったのよ」

「加賀さんのせいだもん。すごく心配してたんだから」

「……」

それを言われると言い返せない。

私のせいなら仕方ないか。もう少しくっつかれていよう。

「……私、加賀さんが運ばれて来たのを見て、もう死んじゃうのかと思った」

「……待って、あなた地下に避難してたんじゃないの？」

「地下の避難所で目が覚めたけど、戻って来た」

「戻って来たって、ダメじゃないそんな事したら」

「それは今はいいの。……結局、死にそうな加賀さんを見て、何も出来なくなったんだから」

「……」

「……私、その時すごく後悔した。最後に喧嘩したまま、一生謝れないのかと思った」
「あれは私も悪かったわ」
「ううん、私こそわがまま言ってごめんなさい。……その後、提督さんから加賀さんの事情を聞いてもっと後悔した」
「……そう」
「あの時、加賀さんが私に指導役を交代する理由を言わないのは、私に原因があるからだと思ってた」
「そんな訳ないでしょう」
「加賀さん優しいから私に遠慮して言わないんだと勘違いしてた」
「……ごめんなさいね。最初に関係者で話し合って、瑞鶴には言わない事になってたのよ」
「それも聞いた。でも私は加賀さんに遠慮しないでって言ったのに、まだ遠慮されてるのかと思った」
「……」
「加賀さんに近づけたと思ってたのは私だけだったと思うと、我慢できなくて……」
「……そう」
「……私、加賀さんの事情も知らずに勝手に勘違いしてわがまま言ってた。ごめんなさい」
「……私も、ごめんなさい。本当はあなたを最後まで指導してあげたいけど、欠陥がある私にはそれが出来ない」
「……うん」
「私が寝ている間に終わったかもしれないけど、右腕のせいで基礎指導も最後まで出来ない。それは申し訳なく思っているわ」
「……うん」
「これからは赤城さん達の元で指導を受けなさい。そうすれば瑞鶴ならすぐ一人前になれるから。分かったわね？」
「……うん」
「本当に分かってる？」
「……分かった。私、頑張るから」

「いい子ね。期待しているわ」

２人きりの医務室で、いつの間にか泣き止んで顔をあげた瑞鶴と見つめ合う。私が彼女の頭を撫でて、彼女は私に抱きついたままだ。近くにある涙に濡れた瞳がとても綺麗に見える。

彼女はいまさら泣いていた事が恥ずかしくなって来たのか、顔を真っ赤にして下を向いてしまった。しかし私から離れる気はないらしい。

私はそんな瑞鶴を見て、彼女には先に伝えておこうと思った。ここで言わないと、また後で泣かれるかもしれない。

「……ねぇ、瑞鶴。大事な話があるんだけど」

「……えっ!? だ、大事な話!?」

なぜか急に慌て出す瑞鶴。先程までのしんみりとした感じはどうしたんだ。抱きついている腕が締まってくるのを感じる。

これ以上締められると腹部の傷跡に響きそうな気がして、私は彼女に声を掛ける。

「そのまま聞いてもらって良いかしら?」

「ま、まま待って! 心の準備をさせて!」

「準備ってなによ?」

「すぅ、はぁ、……よし。……い、良いわよ、何!?」

「瑞鶴、私ね……解体してもらう事にしたわ」

「……解体?」

「そう、解体」

「……解体ってあの解体?」

「どの解体か分からないけれど、艦娘ではなくなる解体よ」

「……」

瑞鶴は呆然とこちらを見つめていた。心なしか顔色も悪い気がする。

「別に死ぬ訳じゃなくて、一般人になるだけよ?」

「……それって、加賀さんと会えなくなるんじゃ……」
「そんな事ないわ。街とかで会えるかもしれないじゃない」
もっとも、私が会いに行くかどうかは分からないが。
解体してもらった後はひっそりと1人で暮らして行くのだ。街なんかには行かないだろう。
「……ヤだ」
瑞鶴は一言だけそう言うと、まだ抱きついたままの手に力を入れてくる。
「……ちょっと、なんでまたさっきみたいに子供っぽくなるのよ」
「加賀さんと会えなくなるのはヤだ」
「また会えます」
「加賀さんはもう会いに来ない気がする」
「……」
「そもそも加賀さんと離れるのがヤだ」
「あなたねぇ……」
「……なんでそんなこと言うの？」
「え？」
「なんで解体してもらうなんて言うの？」
「……」
「加賀さんはここに居るのが嫌なの？」
「……そんな事ないわ。私だってこの場所は好きよ」
「ならなんでそんな事言うの？」
「……私はもう何も出来ないの」
「……どういう事？」
「昨日、無期限で訓練や仕事を禁止されたのよ。それにもし禁止が解除されても、この体じゃ何も満足に出来ない」
「なんでそれが解体になるのよ」
「私が解体されれば、他の加賀が着任出来る。欠陥なんて無い、ちゃんとした加賀が」
「それって……」
「……私はね、今まで役に立とうと頑張ってきた。この場所では役に

立たないものは必要とされない。だからこの場所に居る為に私は自分が出来る事を色々やってきたの。でもそれはもう出来ないのよ。私はこの場所に居て良い存在ではない」
「……そんなの加賀さんが勝手に言ってるだけじゃん!?　それとも誰かにそんな風に言われたの!?」
「誰かに言われた訳ではないわ。私が自分でそう思っているのよ。そして他の加賀を着任出来るようにする事が、私に出来る最後の仕事」
「なんで加賀さんはそんなに……。私はそんなのヤだ。解体なんてさせない」
「……瑞鶴、これは私に出来る唯一の事なの。お願いだから分かって」
「絶対に分かってあげない。……そもそも私は、加賀さんと、離れる、のが、いや、なの〝お！　う〝ぁぁぁ」
せっかく泣き止んだ彼女は、先程の繰り返しのように泣き出した。私に抱きついてくる腕がきつい。なんでそんなに泣くんだ。そんなに私と離れるのは嫌なのか。それを嬉しく思ってしまう自分もいるが、ここで折れるわけにもいかない。
でも結局、瑞鶴を泣かせてしまったな。瑞鶴は意外と泣き虫だったらしい。この短い間で2回も泣いてしまうとは。

どうにかして瑞鶴を泣き止ませようとした時だった。
医務室のドアが開いて誰かが入ってくる。2人いると思われる人物は、こちらに来るといきなりカーテンをめくって中に入ってきた。
「赤城さん、翔鶴も……」
「加賀さん、少しお話があります」
「赤城さん、加賀さんはまだ本調子ではないので、あまり熱くならないで下さいね」
「分かっています。加賀さん、先程のお話ですが、少々聞かせて頂きました」
「聞かせて頂きましたって、あなた達、今入って来たわよね？　盗み聞きしてたの？」
「そんな事はいいんです。加賀さん、あなたはもっと周りが見えてい

ると思っていました」
「周りって……なんの事？」
「よく聞いてください。第1に、瑞鶴も言っていましたが、役に立たないものは必要とされないなんて言うのは、あなただけが勝手に思っている事です」
「それはどう思おうと私の勝手でしょう」
「そして、加賀さんがここに居て良い存在ではないというのも、同じくあなただけが勝手に思っている事です」
「それも私の勝手です」
「そうですね。どう思おうと加賀さんの勝手です。しかし、あなた以外はそう思っていません。そしてあなた以外がそう思っていない以上、許可が降りないのであなたが解体される事はありません」
「……他の言い訳を考えます」
「先程の事は提督に報告します。提督も一度こんな理由で解体されようとしていたと分かれば、次からはちゃんと理由を聞いてきますよ。余程の理由がない限り解体の許可は降りないと思います。」
「……」
「第2に、あなたに出来る事は、他の加賀さんがここへ着任できる状態にする事ではありません。そもそも瑞鶴の基礎指導がまだ終わっていないでしょう。言っておきますけど、私達はあれから瑞鶴に基礎指導をしていませんし、今後するつもりもありません」
「……弓が引けない私にどうやって指導をしろと言うの……」
「基礎指導くらい口で説明して下さい。海には行けるんですから。どうしてもと言うなら手伝ってあげても良いですが、あくまで手伝うだけです」
「……それはまた随分と難しい事を言うわね」
「応用は私が指導しますが、基礎指導は最後まで加賀さんが行なって下さい」
「……」
「第3に、……今の流れはないでしょう!!　あれだけ良い雰囲気で！
瑞鶴は心の準備までしていたんですよ!?　私達のドキドキを返し

て下さい！」
「……待って、どういう事？」
「赤城さん、その辺にしときましょう。提督に瑞鶴を連れて来るように言われてから、だいぶ時間が経っています」
「……そうね。瑞鶴、提督が呼んでいるわ。明日から大本営への出張に付いて来て欲しいそうよ」
「うぅ、わがっ、だぁぁ」
「もう、瑞鶴ったらお二人の前でみっともないわよ？　後で加賀さんの昔話してあげるから泣き止みなさい」
「加賀さん、私達は提督に呼ばれているのでもう行きます。恐らく、あなた以外の正規空母や第1艦隊、他の主要メンバーも明日から提督の出張に同行する事になると思うので」
「は、はぁ。分かったわ。でもなんで私に言うのよ。……その前にいつから盗み聞きしてたの？」
「……加賀さん、これから忙しくなります。それと、無事に目が覚めたようで安心しました。では」
言うだけ言うと、赤城さんと翔鶴は瑞鶴を連れて医務室を出て行ってしまった。
なんだったんだ今のは。しかも赤城さんにお説教されてしまった。もしかしたら翔鶴も怒ってたのかもしれない。
というか何で廊下で盗み聞きしてたんだ。大の大人が2人で盗み聞きって、ただの不審者だぞ。

私は1人になった医務室でため息を吐いた。時刻はもうすぐ１２００になる。そろそろお昼の時間だ。
季節はもう夏に入ろうとしている。
窓の外に目を向けると、空に入道雲があった。先程は見つけられなかったが、いつの間に出来たのだろうか。
明石が帰って来るまでまだ少し時間がある。それまでどうしようかと思っていたら、彼女はタイミング良く医務室に帰ってきた。
「あら、工廠での用事はもう終わったの？」

「ええ、大丈夫です。赤城さんと翔鶴さんに瑞鶴さんが連れていかれるのを見て、もう戻っても大丈夫だと思いました」
「なんでそれが医務室に戻る判断になるのよ」
「いろいろあるんですよ。それより、お昼は食べられますか？」
「いろいろって何よ。……今はお腹が空いてないからいらないわ。夕食は食べられると思うけど」
「分かりました。私はお昼を食べてからまた工廠に向かいますが、加賀さんは寝ていて下さいね。くれぐれも外には出ないようにお願いしますよ。時々様子を見に来ますから」
「別に来なくて良いわよ。自分の仕事に集中しなさい」
「加賀さんの様子を見るのも私の大切な仕事です。それに点滴の交換もしなくてはいけませんし」
「面倒をかけるわね」
「いえいえ、仕事ですから。……それにしても寝れない間、ずっとここで何もしないのは退屈ですよね。眠くなる様な本でも用意しますよ」
「それは助かるわ。正直すぐには寝られないと思うから」
「意外と横になったらすぐに寝てしまうかもしれませんけどね」
「そんな事したら夜に寝られなくなりそうね」
「大丈夫です。その時は飲んで5秒で寝られる薬を処方してあげます」
「それは安全なんでしょうね？」
「ちゃんと私と夕張さんが飲んで実験してますから」
「そう言って、前に駆逐艦を戦艦みたく大きくした事は忘れてないわよ。全員なかなか解毒剤を飲んでくれないし、特に清霜や暁とかの何人かは最後まで抵抗して大変だったんだから……」
「そんな事もありましたねぇ。あれは戦艦と重巡を小さくした後でしたっけ。あの薬は戦力強化案として、大本営で研究が続けられているらしいじゃないですか」
「少なくともここで薬の効果が出た時は、外見以外は何の性能も上がらずに被弾する面積が広くなるだけだったけどね」
「懐かしいですねぇ。夕張さんが面白がって大量に配るから被害が広

がったんでしたっけ」
「そういえば夕張は今工廠に張り付いているんだったかしら。彼女にも後でお礼を言わないと」
「そうですね。忙しくてなかなかこちらに来られないので、せっかく加賀さんの目が覚めたのに話せないと嘆いていました」
「私が寝ている時に来て起こせば良いのに」
「さすがに起こしてまで話すのは遠慮しますって。実は加賀さんが寝ている時に何度か来てるんですよ」
「……彼女って運が低い子だったかしら」
「軽巡の中ではどちらかと言うと高い方なんですけどね」
「少し前は明石と夕張の2人で私の経過を見ててくれたんでしょう？」
「ええ。最近は私が加賀さん優先で仕事してますけど、最初は私と交代でした」
「何で交代制ではなくなったの？」
「私の方が医者の真似事に詳しいっていうのもありますけど、ずっと工廠にいると艤装を整備や修理する機会が自然と多くなりますからね。夕張さんは加賀さんより早く出来る様にするんだって言ってました」
「そう。何にしても早く出来るに越したことはないわね」
「はい。私も負けていられません。あ、これさっき言ってた眠くなりそうな本です」
「ありがとう。そういえば昼食に行くんだったわね。引き止めちゃってごめんなさい」
「良いんですよ。私は加賀さんと話せて嬉しいですから」
そう言って明石は医務室を出て行った。
私は今渡された本を見てみる。どうやら哲学書のようだ。軽くページをめくってみても文字しかない。
だが、甘いな。私はこういう本は結構好きで、建造されたばかりの頃に時間があった時はたまに読んでいた。この程度、今日中に読破してやる。

そういえば明石に解体の件を言うのを忘れていた。
赤城さん達や瑞鶴には悪いが、私は解体してもらう事を諦めていない。
私は自分の考え方を改めてはいないし、出来る事をしたいと思っている事も変わらないからだ。
だからまずは提督に解体の許可を貰わないといけない。
そう考えると明石に解体の件を言うのは、提督に許可を貰った後の方が良いかもしれない。大まかな日程が分からないと明石も準備が出来ないだろう。
赤城さんたちのおかげで簡単には許可が降りなくなっているだろうし、いつ解体してもらえるか分からないからだ。

この本を読み終わったら提督を納得させられる理由を考えなくては。提督が出張から帰って来たらすぐに許可を貰いに行こう。
空いた時間は解体後にどうやって生活するかを考えるのだ。この場所から遠い所が良いな。
そう思いながら私は本の表紙を開いた。

その後、私は夕食の時間になって戻って来た明石にまたも起こされる事になった。途中で点滴の交換に来た時はもう寝ていたらしい。
甘くみていたのは私だったようだ。

11話

11話

季節はもう夏に入り、外にはセミの声が響いている。
遠くの空には積乱雲が生まれ、気温と湿度の高さが夏特有の空気感を演出していた。

そんな中、私は冷たさが感じられる床に座っている。
普段から限られた人しか来ないこの場所は、人の喧騒などは聞こえず、至って静かなものだ。先程鳴いていたセミの声さえ無くなれば、後は周りの木々の葉が騒めく音しか聞こえない。
それにここは緑が多いせいか汗が噴き出す様な暑さは無く、吹き抜けて行く風が気持ち良い。
昼寝には最適な環境だなと思いながら、私は前に向けたままの視線に意識を戻した。

そこには弓を構えて的を睨む瑞鶴の姿があった。
今私は瑞鶴の基礎指導として地上での発着艦訓練を見ている。
以前、私が既に合格をあげた訓練だが、彼女自身が納得いかずに続けている訓練でもあった。
あの時の私は彼女が足りないと言っていた物が何か全く検討が付かなかったが、今になってそれがはっきりと分かった。
彼女の完璧な姿勢と周囲が別空間の様に感じる事は前と変わらないが、それ以外の雰囲気がまるで違う。
彼女は弓を構えて集中しながらも、周りを威圧するような空気を放つ。
いつの間にか放たれた矢は艦載機へと姿を変え、それらの攻撃は吸い込まれる様に的の中心を貫いた。
瑞鶴は艦載機に帰還を命じて安定した着艦をさせた後、残心による余韻と鋭い空気を収めた。

あの時の彼女は『凛々しさ』と『美しさ』などと表現していたが、その言葉は間違っていなかった。
今の瑞鶴は確かに凛々しさと美しさを兼ね備えている。
私は思わずそれに見惚れてしまっていた。赤城さんや翔鶴などの正規空母でも、これ程の事は出来ないのではないか。
ただし、1つ引っ掛かる事がある。
瑞鶴は自身の事を私と比較して、何か足りないと言っていたのだ。
私が同じ事をやっていたとはとても思えない。
恐らくだが、私にもごく僅かにあったかもしれないものを瑞鶴が見出して、ここまで昇華させたのだろう。
今の瑞鶴を見て、既に彼女は私の届かない所にいるのだと思った。

彼女は嬉しそうな顔で話しかけて来る。
「どうだった？　加賀さんに近づけたと思うんだけど」
「……そうね。正直、驚いたわ。これ程のものを見たのは初めてよ」
「本当!?　やった!!」
「でも、私からは遠ざかったわね。私にはこんな事は出来ないもの」
「？　何言ってるの？　加賀さんのお手本はもっと凄かったじゃない」
「あなたこそ何言ってるのよ。私がこんな事出来る訳ないでしょう。誰かと間違えているわ」
「いやいやいや、加賀さん本当に何言ってるのよ。　私が加賀さんと他の人を間違える訳ないじゃん。というか、他の正規空母の人達も加賀さんの発着艦をお手本にしてるって本人達から聞いてるんだから」
「なによそれ、初耳なんだけど」
「知らなかったの？」
「……瑞鶴、よく考えなさい。私より赤城さんや翔鶴の方が上手いに決まっているでしょう。彼女達は第1艦隊所属で練度も私より上なのよ？　翔鶴なんてここでは私より先輩なんだから」
「確かにみんなそれ以外は負けないって言ってたけど、発着艦だけはどうしても勝てないって言ってた」

「そんな事ありません。みんなに騙されています」
「えー、そんな嘘つかないと思うけどなぁ。でも、少なくとも私が見た加賀さんのお手本はこんなものじゃなかったわ。これは私が自分で見たんだから絶対よ」
「瑞鶴、多分あなた疲れているのよ。最近は特に暑いからね。ごめんなさい、私がちゃんと気付いていればこんな事には……」
「ちょっと！　私は別に疲れてないし、見間違いでも人違いでもないわ！　もしかして自覚ないの!?　私が見た加賀さんはもっと凄かったのよ！」
「……そうね。ところで今日はもう終わりにして何処かで寝ましょうか。ちょうど医務室が空いているから連れて行ってあげるわ。明石に見てもらわないと」
「だから疲れてないってば！　なんで信じてくれないの!?」
瑞鶴が私に詰め寄って来た所で、建物の入口から翔鶴が入って来るのが見えた。
彼女は私と瑞鶴の姿を見つけると、ゆっくりこちらに近づいて来る。
「瑞鶴、その辺にしなさい」
「翔鶴姉！　加賀さんが私の言う事信じてくれない！　加賀さんの発着艦は凄いって翔鶴姉も思うわよね!?」
「翔鶴、どうしたの？」
「加賀さん、大本営から急ぎの書類が来ています」
「分かったわ。すぐに戻ります」
「２人とも無視しないでよー！」
「瑞鶴、加賀さんはそれに関して自覚が無いから幾ら言っても無駄よ」
「翔鶴、あなたもそんな事言うのね」
「私も昔、同じ様な事を言った記憶がありますから。結局最後まで加賀さんより私の方が上手いと言って認めてくれませんでしたけど」
「そんな事あったかしら。全く覚えてないわ」
「凄く昔の事です」
「翔鶴姉、その話聞かせて！」

「はいはい。夜に聞かせてあげるわね」
「やめて欲しいんだけど」
私はそう言いながら立ち上がり、翔鶴の方に向き直ろうとする。
しかし立ち上がる時にバランスが崩れてよろめき、瑞鶴に支えられてしまった。
「おっと、加賀さん、大丈夫？」
「悪いわね。まだバランスが取りにくくて」
先日右腕を失ってから少し経つが、未だにバランスが取りにくい時がある。早くこれにも慣れないといけない。

「瑞鶴、申し訳ないけどここの鍵を閉めておいてくれるかしら。それと１５００から予定している海上での発着艦訓練は予定通り行います」
「分かった。準備しとくわ」
「じゃあ翔鶴、行きましょうか」
「はい」
翔鶴と共に訓練場を後にする。
執務室がある建物までの暑い道のりを歩く中、私は途中で翔鶴に話しかけた。
「瑞鶴はずっとあの訓練をしていたんですって？」
「そうです。加賀さんが眠っている間もずっとあの訓練をやっていました。残っていた基礎指導は加賀さんが動けるようになるまでやらない事にしたんです」
「残っていたと言っても、海上での発着艦訓練だけでしょう。あれから今日まで2ヶ月もあったんだから、誰かがやってあげても良いと思うんだけど」
「瑞鶴の基礎指導は加賀さんの担当ですから。それに瑞鶴も加賀さんに指導して欲しがってますし」
「……まあ、良いんだけどね」
赤城さん達は本当に瑞鶴の基礎指導をしないつもりらしく、また私が彼女の基礎指導をする事になった。そして残っていた海上での発

着艦訓練を一昨日から開始している。
私は弓が引けないので、誰かに手伝ってもらいながら、何とか口だけで瑞鶴に指導をしている状況だ。
昨日は瑞鶴にお手本を見せるため赤城さんに手伝いをお願いしたのだが、全く指導する様な事はせず私に指示された様に動くだけだった。それどころか手が空いた時に暇だと言って雑談をしてくる始末だ。
私は必死に口で説明しようと考えているのになんて事してるんだ。覚えていろ、赤城さんの応用指導になったら様子を見に来たと言って私も雑談してやる。
今日から瑞鶴本人にも発着艦を行なってもらうが、数日で完璧になるだろう。慣れればすぐに出来る訓練なのだ。優秀な彼女には物足りないかもしれないな。
横にいる翔鶴と執務室を目指しながら、私は今日行う予定の訓練について考えていた。

ーーーーー

結果として、私の解体は認められなかった。
自分で解体を決めて、瑞鶴に泣かれ、本に負けて明石に起こされた後、私はひたすら提督に解体を許可してもらう理由を考えた。
そして提督が出張から帰って来たその日に解体の許可を貰おうとしたのだが、彼は私の解体を認めなかった。
幾度も理由を再考して出直したが、彼は一向に首を縦には振らな

い。２０日間に渡る２８回目の申し出を却下された時、私は提督に詰め寄り、なぜ許可を降ろさないのかを聞き出そうとした。
しかし彼は、今は話せないがもうすぐ分かる、と言って理由を教えてくれない。なるほど、これは確かに来るものがあるな。瑞鶴があの時怒ったのも頷ける。私は自分の行いに反省しながらも大人しく引き退るしかなかった。解体の申し出だけは諦めずに続けていたが。

提督が帰って来てから私のお見舞いが全員に解禁された。
私の元に来てくれる子達は、私が解体申し出のための申請書を書いているのを見る度に、何とも言えない顔を向けて来る。特に仲が良い子達は、無駄な事は止める様に言ってきたりする。しかし、私はまだ無駄だとは限らないだろうと諦めなかった。

そして４３回目の申し出を行なおうとした時に提督から呼び出しが掛かり、私は執務室に向かう事にした。
彼はあれ以来執務室に居る事が多くなり、前までは私の定位置だった机と椅子は、今では提督の定位置に変わりつつある。

ーーーそこで私は提督から辞令を受ける事になった。

〝現指揮官が異動し次第、航空母艦　加賀を後任の鎮守府指揮官とする〟

まとめればこんな感じの辞令だ。
意味が分からない。

艦娘は鎮守府の指揮官たる資格を有する事が出来ない。それは軍の決まりである。
私は提督がまた仕事をせずにふざけた事を始めたと思い説教をしようとした。
しかし彼は私を椅子に座らせて自分の帽子を被せると、何処からか子猫を取り出して私の膝にそっと乗せてくる。
子猫は私の顔をじっと見てきた。
いきなりそんな事をされたら、私は口を閉じて固まるしかない。動いたら子猫が落ちてしまいそうだ。
提督は鞄を持つと、後は頼んだと一言だけ残して部屋を出て行ってしまった。

ドアが閉まり数秒して、我に帰った私は今のは提督が私の説教から逃げるの為の行動だと理解する。
すぐに子猫を机に移動させて追いかけようとドアを開けたが、彼は既に廊下を駆けていた。一瞬後ろを向いて私の姿を見ると、さらにスピードを上げて逃げて行く。
私は提督を追いかけようとするが、なかなか距離が縮まらない。それどころか、なぜか全ての曲がり角で軽巡や重巡に衝突しそうになったり、何回も駆逐艦に囲まれたり、戦艦や空母が道を塞いでいたりで距離が離されていく。
私は道を迂回しながら提督を追いかけるも、彼は車に乗って鎮守府の出入り口から何処かへと行ってしまった。
……やられた。提督の逃走は久しぶりだから、先に車を押さえておくのを忘れていた。
少し小言を言うだけで解放する予定だったが気が変わった。帰って来たら朝日が昇るまで説教してやる。

私は説教の内容を考えながら執務室に引き返した。子猫の面倒を

見なくてはいけない。名前は何というのだろうか。
しかし執務室のドアを開けた私を待っていたのは、子猫だけではなかった。

現在秘書官として働いている吹雪と長門、秘書官補佐の天龍と球磨、それと大淀がビシッとした感じで立っている。
大淀以外は全員古参メンバーだ。
特に吹雪と長門は第2艦隊が出来たすぐ後から着任しており、付き合いが長い。
そして部屋に入って来た私に向き直ると一斉に敬礼をしてきた。
何やってるんだこの子達は。

「提督が鎮守府に着任しました。これより艦隊の指揮に入ります」

私はとっさに後ろを見るが誰もいない。
右に移動してみると皆の視線が付いて来る。左に移動しても同じだ。
「……あなた達が提督の遊びに付き合うなんて珍しいわね。特に長門なんて絶対にやらないと思っていたわ」
「別に我々は遊んでなどいないさ。新しい提督に挨拶をしているだけだ」
「加賀さん、辞令を受け取っていますよね？」
「ええ、吹雪。何でも私が後任の指揮官になるそうよ。こんなもの作って遊んでる暇があるのなら、その分作戦の1つでも立てたらいいのに」
「加賀は提督の遊びだと思っているみたいだが、そいつは本物だぞ」
「そんな訳ないでしょう。そもそも軍規で艦娘は指揮官になる資格を有する事が出来ないとあるじゃない」
「それに関しては先日軍規が変更されたクマ。今は艦娘でも指揮官になれる様になったクマ」
「球磨、軍規はそう簡単に変更されません」

「なら大本営に確かめてみるといいクマ」
「……ここに書いてあるのは提督が異動になり次第となっています。もしこの辞令が本物だとしても、この鎮守府の指揮官は彼です」
「残念だが、その提督は本日付けで大本営に異動となっている。さっきこの鎮守府から出て行くのを見送っていたじゃないか」
「見送っていたのではなく、追いかけていたんです。帰って来たら朝まで説教です」
「それは難しいですよ。前司令官はもうここには帰ってきません。そして辞令に書いてある通り、次の指揮官は加賀さんになります」
「……」
「加賀さん、まだ信じられねぇか？」
「天龍、子猫と遊ぶのは後にしてくれないかしら。大淀も」
「おおう、悪い悪い」
「す、すみません。可愛くてつい」
「そうだクマ。吹雪、あれを渡すといいクマ」
「そうですね。これがあれば信じざるを得ないでしょうから」
そう言って吹雪が渡してきたのは白い軍服と身分証明書だった。
身分証明書には私の顔写真と名前、この鎮守府の指揮官であるという文言が書いてある。
「ほら、軍服にも加賀さんの名前が刺繍してあるでしょう？」
確かに吹雪が見せてくれた上着の内側に、私の名前が刺繍してある。
いきなりの展開に混乱する私に、吹雪が軍服の上着を羽織らせてきた。
「やっぱり似合いますね。帽子もあるから丁度いいです」
「貫禄があるクマね。隻腕なのが特にそう感じさせるクマ」
「ほう、なかなか良いじゃないか。ビッグセブンを指揮するに相応しい外見だ」
「俺の眼帯も付けるか？　更に格好良くなるぞ？」
「天龍さん、やめてください。片目だと仕事に影響が出そうです」
「大淀は固いなぁ。俺や木曾みたく慣れれば良いだろうが」

「あなた達、ちょっと待ちなさい。私はまだこの状況を飲み込めていないのだけど」
「？　そんなに難しいことじゃないですよ？　昨日までいた司令官が異動になって、加賀さんがここの司令官になっただけじゃないですか」
「……だけって吹雪、仮にも長い付き合いだった彼が異動になって何も思わないの？」
「それは確かに寂しいですけど、少し前から知ってましたし、送迎会もやりましたから」
「私はそのどちらも知らないんだけど」
「みんな前司令官から加賀さんには秘密にする様に言われていたので。それにみんなも知ったのは提督が出張から帰って来てからです」
だからみんな私が申請書を書いていると、あんな顔をしたり、無駄だと言って来たりしたのか。
私は思わず黙り込んでしまった。
なぜ秘密にする必要があったのか。
この事を知っていれば私は……

……知っていれば私はどうしたのだろうか。
解体の申し出をやめていたのだろうか。
それとも何としても解体されるために無断で工廠へ行っていたのか。

多分工廠へ行っていただろうな。
もしかしたら自ら海に沈んでいたかもしれない。
今まで提督の元で上手く行っていた事を変えなければならない。
それは私が居なくなれば行われなくなる。
そうしたら私はすぐにでも居なくなっていただろう。だから私には知らせずにいたのか。
この鎮守府から提督が居なくなれば、すぐに誰かがその立場に着かなければならない。そして後任が私になってしまえば、私は簡単にそ

の立場を降りられなくなる。
なるほど、やはり作戦立案が得意なだけあるな。

しかし納得いかない事がある。
また私だけ仲間外れか。本当に泣くぞ。
「そんなに不貞腐れるな。送迎会に呼ばれなかったくらいで。次はこの長門がお酌をしてやるから機嫌直せ」
「不貞腐れてません」
「どれだけ長い付き合いだと思ってるんだ。それくらい分かる」
「加賀さん、大丈夫ですよ。これからみんなで加賀さんの就任祝いです！　もう全員食堂に集まってますから早く行きましょう！」
「俺達は先に行ってるぜ。球磨も大淀も行くぞー」
「早く来るクマー」
「先に行って待ってますね」
そう言うと3人は子猫を連れて先に行ってしまう。
吹雪と長門だけは私が動くのを待っている様だ。

天龍達を見送りながら考える。
私はまだここに居ていいのだろうか。
この指揮官という立場に居座ってしまってもいいのだろうか。
私が居なくなればちゃんとした他の加賀が着任出来るんだぞ。
その機会をダメにしてまで私がここに居て、この鎮守府のためになるのだろうか。
でも、わざわざ後任に私を指名したのは何か理由があるのではないか。そんな希望を持ってしまう私もいる。

「……ねぇ。何で後任は私なのかしら」
「どうしたんです？」
「私が後任になった理由を教えて」
「……それは色々ありますけど、大きな理由は3つあります」

「3つも？」
「1つ目は鎮守府の指揮官としての能力が十分にあると判断された事です」
「前提督は能力に偏りがあったからな。作戦立案と戦闘指揮以外は全て加賀が行なっていただろう」
「司令官不在の時も加賀さんが代理で作戦立案と戦闘指揮を行なっていた事がありましたからね。普通の司令官よりは十分能力があると言えます」
「そんな事ないと思うけれど。このくらい誰でも出来るわ」
「2つ目は鎮守府内の全ての仕事経験がある事です。工廠や食堂の仕事などを含めて加賀さん全部出来ましたよね」
「それは理由になるの？」
「なりますよ。要は上から下までの仕事を全て把握している訳ですから、偏った負荷も発生しなくなりますし運用が効率的になります」
「私は他の鎮守府の工廠や間宮を見た事があるが、あそこにだけは行きたくないと思ったな」
「そんなに変わらないと思うけど」
「3つ目はみんなから絶対的な信頼を置かれている事です」
「それはあなた達もそうでしょう。私以上の適任がいるわ」
「加賀、さっきから否定してばかりだが、これらの理由は第三者からみても納得の出来るものだ。そして理由の根拠は鎮守府の艦娘全員の意見から来ている。それに、前提督からの強い推薦もあるんだ」
「推薦って……」
「前提督は昔から大本営に憧れていたからな。私達が心配でここを離れなかったが、加賀になら後を任せても大丈夫だと思ったのだろう」
「提督は大本営から声が掛かっていたのね」
「らしいな。だから時々、大本営に出張していたようだ。そこで軍規の変更を話し合っていたらしい」
「それって今回の……」
「ああ、艦娘が指揮官になれる様にだ」
「……そう」

「つまり、かなり前からお前が指揮官になり得る事を予想していたのだろう。さすがにきっかけは予想出来なかっただろうが」
「すごいですよねぇー」
本当にすごい人だ。
昔からこんな未来の事を見通していたなんて。
「……私にはそんな事出来ないわ」
「別にこんな事期待していない。これは前提督が特殊だっただけだ」
「……仕事も前みたいに出来ないのだけど」
「その点は大丈夫ですよ。これからは今の体制で行きます。私達5人いれば今の仕事もどうにか処理が出来てますから、加賀さんも含めれば余裕ですよ！」
「……まだ、私にも出来る事があるのね」
「ああ、そうだ。ここの指揮官はお前にしか出来ない。これからまた役に立ってもらうぞ」
「そうです。加賀さんが居ない間、すごく大変だったんですから。その分これから仕事してもらっちゃいます」
「……」
気持ちが切り替えられていく。
確かに先程の理由からすれば、私しか候補は居なくなるのだろう。

ーーー私はまた皆の役に立てるのか。

まだこの場所に、私の居場所はあるらしい。
みんなと一緒に居る事が出来る。
あれほど落ち込んでいたのが嘘みたいだ。

「加賀さん、もう行きますよ。みんな待ってます」
「そうだぞ。いつまでここに居るつもりだ。吹雪、私が加賀を運ぶから、ドアを開けてくれ」
「分かりました！」
「なに元気に返事してるのよ。自分で歩けます」

「聞こえんな」
「聞こえませんね」
「ちょっと、やめ、やめて！　降ろしなさい！」

そのまま長門にお姫様だっこされながら、私は2人と共に就任祝いの会場へ向かう事になった。

ーーーーーー

瑞鶴の惚れぼれする発着艦を見てから、6日が経った。
結局あれから瑞鶴は、私の発着艦に関して意見を曲げる事は無かった。
それどころか他の正規空母も彼女に便乗してくる始末だ。また私だけ仲間外れなのか。涙目になったら言うのやめてくれたけど。

今日は瑞鶴と海上での発着艦訓練をする最後の日だった。
彼女は私の口だけの分かりにくい説明にも関わらず、無事に合格をあげられる位に動ける様になった。
そして先程訓練が終わり、瑞鶴は全ての基礎指導を終わらせた事になる。
これで私の指導役は終わりだ。
長かった気もするが短かった気もする。いや、実際かなり短いのだが。
これほど早く基礎指導を終わらせた艦娘は、私が知る中では赤城さんくらいだ。翔鶴はどうだったのだろうか。今度聞いてみよう。
彼女がこれ程までに成長した事を嬉しく思うと同時に、私がもう彼女の指導役でない事を寂しく感じた。胸が痛い。

訓練の片付けが終わって、私は瑞鶴と並んで歩いている。

彼女は歩きながら私の左腕に抱きついていた。
私の顔は赤くなっていないだろうか。
あれから瑞鶴のスキンシップがさらに激しくなった。
以前はたまに手を握ってくる程度だったが、最近はいつも側に居て頻繁に抱きついてくるのだ。
食堂では隣に座り横から抱きついてくるし、私が廊下を歩いていれば後ろから近づいて抱きついてくる。
訓練中を除き、一緒に居る時は基本的に私の腕に抱きついた状態で移動する。
最初は瑞鶴にやめる様に言ったのだが、聞き入れられた事はなかった。
「瑞鶴、歩き難いわ」
「そろそろ慣れてよー」
「私が慣れるの？　あなたが離れれば解決するんだけど」
「加賀さんが本当に離れて欲しいなら離れる」
「……」
「んふふ、じゃあこのままね」
そう言って彼女は頭を擦り付けてくる。彼女の顔は緩み切っていて、とても機嫌が良さそうだ。前提督がおいていった子猫みたいでかわいい。
私の口元もついつい緩んでしまいそうになる。それを必死に隠しながらも、自分の気分が高揚しているのが分かった。
右腕があったら我慢出来ずに撫でていただろう。

私は指揮官になってから変わった事がある。
以前の様に自分の欠陥を気にする事が無くなったのだ。
それに気付いたのは最近の事だった。
前は常に心のどこかでそれを気にしていたものだが、最近は全くそんな気持ちが無くなってしまった。

そうなった原因はなんだろうか。

まだ私に出来る事があるからだろうか。
新しい自分の居場所が出来たからだろうか。

確かにそれらも原因の1つだろう。
しかし、私は1番の原因はこれだと思っている。

瑞鶴が隣に居てくれるからだ。

彼女の隣に居るだけで幸せな気分になり、気分が高揚してしまう。世界はこんなにも素晴らしく、自分の欠陥なんてその前では些細な事に思える。
最初は戸惑ったが、自分のこの気持ちに気付いてからはすぐにそれが分かった。

そして、今まで私は瑞鶴に指導役として接していたが、先程その立場は無くなってしまった。
もう彼女とは対等な立場になったのだ。
辺りは夕焼けのオレンジ色に染まり、水平線に太陽が沈んで行くのが分かる。
そして珍しい事に、近くには誰も居なかった。
「……ねぇ、瑞鶴」
「なにー？」
「大事な話があるんだけど」
「まだ解体の事諦めてないの？　もう提督になっちゃったんだから無理だって」
「そうじゃなくて……」
「あ、分かった。そんな風に言っても私は離れないからね。加賀さんがまた無理したり自分を追い詰めない様に見張っとかなきゃ」
「いや、それでもなくて……というかそれは離れてても出来るでしょう」
「こっちの方が近くに加賀さんを感じられるから」

「……」
私は意外とチョロいらしい。顔が熱くなり、赤くなっているのが自分でも分かる。

こんな掛け合いにも幸せを感じてしまう。
他の加賀ならこんな事はありえないだろうな。
そもそも五航戦の彼女に対してこんな気持ちを抱く事自体がありえないか。

今の私は以前の様に卑屈になったり、迷ったりはしない。そこだけは他の加賀に近づけた気がする。
しかし、私は別に他の加賀を目指している訳ではないのだ。

「ねぇ、瑞鶴……」
「今度はなに？」

そうだな。なら当面の目標は、彼女みたく正直で真っ直ぐになる事としよう。

「……私ね、あなたの事が

ーーーそう、だって私は、他の加賀とは違うのだから。